

ヴェーユ感受性研究⑤

Étude sur la sensibilité de WEIL

村 上 吉 男

Yoshio MURAKAMI

XV

ところが「〈思惟（魂）〉から〈行動（身体）〉への関係」や「〈行動（身体）〉から〈思惟（魂）〉への関係」とした各関係の成り立ちは、筆者が先きに取り上げおいた「〈感覚〉と〈感受性〉」の関係をどうみていたかに触れずして語れないといわなければならなくなる。なぜなら〈感受性〉は〈脳〉や内臓を含めていう身体（諸）（器官）の各〈運動（行動）〉（この〈運動（行動）〉は人間が生あるかぎり、筆者に強調された「はげしい」それをだけでなく、「日常（不断）」に動く〈運動（行動）〉）をさすといわせるなかで、〈運動（行動）〉を起こす場を、要は〈感受性〉を生む場をどこに見定めるかは、筆者が当然当の身体（諸）（器官）（要するに身体（諸）（器官）の各内部を通る〈神経〉や「血管」）であると答えたとして、それでも身体（諸）（器官）の〈運動（行動）〉すなわち〈感受性〉はいかなる手助けもなしに、それ自身たる能力によってもたらされ得るのかを、換言すると例の〈感覚〉による「色彩」のことはともかくも、一方でヴェーユがたとえば他者の〈苦しみ（不幸）〉や〈世界的美〉に立ち会うと語る際に、おのおのと接し得る能力が視覚、聴覚や触覚などによる各〈感覚〉に先行させられるのとかかわらないで、突如各身体（器官）（要するにその各内部の〈神経〉や「血管」）において生み出されるかを検討し明らかにさせておかねばならぬからである。筆者のみるところ、〈運動（行動）〉すなわち〈感受性〉はそれ独自で生じるのではないからして、否であると、つまり〈感覚〉と関係しないではいられないとみることができるのだ。しからばどのような関係

であるのか。「〈感覚〉と〈感受性〉」が関係することを証すにあつて、一に、すでに指摘しておいたごとく、〈感受性〉は〈感覚〉と同じ身体（諸）（器官）で、つまり視覚、聴覚や触覚をはじめとする「五感（官）」で、ならびに内臓（感覚）や〈脳〉の〈感覚〉産出にかかわる部位（それは彼女にいう〈魂（une âme）〉であった）で、要は以上の各身体（器官）の内部の〈神経〉や「血液」で当の〈感覚〉を生み出す、そのいずれをもまた〈感受性〉のいわば通り道として「利用」し得たことが取り上げられていなければならなかった。一に、筆者が「利用」と述べたとて、「〈感覚〉と〈感受性〉」の関係にとっては、この〈感覚〉が上記していた身体（諸）（器官）のいずれかに、〈感受性〉より先行させられた「受容」能力でなければ、〈感受性〉が生じてこないであろうことに、換言すると〈感受性〉よりか先に、〈能動〉能力〈感覚する〉とその〈受動〉能力〈感覚〉が身体（諸）（器官）のいずれかの〈運動（行動）〉としてもたらされていなければならぬことにあった（〈感受性〉も〈運動（行動）〉であった。だがここでは〈感覚〉や〈感受性〉の〈運動（行動）〉の各相違についての繰返しを控えおく。また身体（諸）（器官）の〈能動〉能力〈感覚する〉とこれも疾うに記し後述する〈能動〉能力〈感じる〉の各語は彼女において、ともに〈ressentir〉が使用されるが、筆者は〈感覚〉と〈感受性〉の各〈能動〉能力に違いを出すべく訳したと付加しておく）。だから〈感受性〉たる〈運動（行動）〉はまずは〈感覚〉たる〈運動（行動）〉に委ねられているといえるわけである。一に、上記していた「受容」（の語）について、要は〈感覚〉の何らかの身体（器官）への「受容」に関してなおも語るならば、かかる「受容」が例の視覚の場合、身体（器官）たる「目」の外（側）（の世界）から取り込まれる、いわば被写体によって成るといえるかぎり、筆者は被写体を「目」の対象（外的対象）にいい換えてみても、「色彩」を示す物がただけでなしに、当然、彼女にいう、他者の〈苦しみ（不幸）〉や〈世界の美〉がこの（外的）対象に与するであろうし、各（外的）対象に、再度いうが、〈感覚〉が何より先に、〈能動〉能力〈感覚する（「見る」「聞く」や「触れる」）〉とその〈受動〉能力〈感覚（「視覚」「聴覚」や「触覚」）〉としてそれぞれ働き（動き）かけたり、働き（動き）かけられたりすることを可能にさせるであろう（筆者は先に本文で「場」と記したが、「場」とは「要するに身体（諸）（器官）の各内部を通る〈神経〉や「血

管」で〈運動（行動）〉を起こす「場」を示唆させることであり、その〈運動（行動）〉には〈感覚〉のばかりか、〈感受性〉の働き（能力）がみられることになる。するとこの〈運動（行動）〉を起こす、つまり〈感覚〉と〈感受性〉を生み出す「場」は各能力の対象（内的対象）になるといい換えられてかまわない。これについては本文で再度検討する）。また一に、何度となく書き入れた〈能動〉と〈受動〉も「動き」に変わりがないから、〈運動（行動）〉に等しいことを含意させて用いられた各語であると筆者に判断される。だからこの各〈運動（行動）〉は視覚を例にしたように、なるほど外的対象を「受容」せども、上記括弧内で示した、「受容」の「場」を「目」たる身体（器官）内部でのこととみるならば（これも後述で明かされる）、この内的対象において、「〈感覚する〉とその〈感覚〉」や「〈感じる〉とその〈感受性〉」という各能力をもたらしべく現出されるにちがいないと受け取っておかねばならない。要は各能力は〈運動（行動）〉する「場」（内的対象に位置づけられる）で発揮せしめられるのだ。もとより彼女に〈運動（行動）〉が〈変化〉をあらわし、〈変化というものは質的である〉とみなされていた〈感覚〉にあって、筆者がこの〈運動（行動）〉なる〈能動〉と〈受動〉を世間でときにいう「刺激」と「反射（反応）」に置換させ得るといえるはまだしも、ここで注意すべきは、視覚の例において、かの他者の〈苦しみ（不幸）〉や〈世界の美〉をさえ含ませる外的対象のいずれも「目」に「受容」されるとみなす際、視覚（目）内部における〈能動〉能力と〈受動〉能力が各「受容」された外的対象をして「眼球」の「網膜」に映る像を、すなわちあのデカルトにいわせる〈figure（表象）〉⁽¹⁾をかたちづくらせることにある（筆者は以下の本文でこの〈表象〉（の語）をもって表記する）。要するに〈感覚（視覚）〉はその〈能動〉と〈受動〉の各能力である〈運動（行動）〉から「網膜」に〈感覚（視覚）〉による〈表象〉を出現させ、外的対象の「受容」の「場」であるこの「網膜」は〈感覚（視覚）〉にとって〈感覚する〉とその〈感覚〉を生じさせるところの内的対象とみてしかるべきである。とまれ〈感覚（視覚）〉における〈表象〉が〈表象〉形成以降、「網膜」にとどまって消え去るか、あるいは（脳）に伝えられるかするにせよ、ここではこの各場合をおもに質すは省くほかに、次のことを、つまり例の「見る」「聞く」や「触れる」各身体（器官）内部での〈運動（行動）〉においてもたらされる各〈表象〉

はしかし、「網膜」などに〈表象〉として映る〈変化〉でしかないとも見えるのだから、〈感覚（視覚など）〉をさすだけに使用されているといい得ることを付け加えおく。

それでは一に、〈感受性〉についてはどう語ることができるかである。ヴェューユに〈運動（行動）というものは量的である〉と断じさせる〈運動（行動）〉すなわち〈感受性〉にあって、筆者はここにたどりつくまでの論述で、わけでも例の、他者の〈苦しみ（不幸）〉や〈世界の美〉を外的対象として彼女に接触させるべく捉え、何とはなしに外的対象に押し込めるままに放置し、さらに「五感（官）」「内臓（感覚）」や〈脳〉（の〈感覚〉にかかわる部位）を含む身体（諸）（器官）のいずれにも生じる〈感覚する〉とその〈感覚〉の各能力のように、直接〈感じる〉とその〈感受性〉の各能力が上記した各外的対象に対し、働きかけたり、働きかけられたりする〈運動（行動）〉であると同時に、この〈能動〉と〈受動〉それ自身は繰返すが、他者の〈苦しみ（不幸）〉や〈世界の美〉の各「受容」がある身体（器官）の「日常（不断）」の〈運動（行動）〉よりか、同じ身体（器官）を高ぶらせる〈運動（行動）〉によって、換言すると同じ身体（器官）内部の〈神経〉や「血液」を各興奮せしめる〈運動（行動）〉によって、なかでも〈神経〉における「シナプス（神経細胞接合部）」に「インパルス（電氣的波）」などが伝達されて、「シナプス」をしてその「閾値」を越えさせる〈運動（行動）〉によって成るところにみられると主張してきた（筆者にとって、あらゆる身体（器官）を「動かす」のが〈運動（行動）〉に与し理解される〈感覚〉でなしに、〈運動（行動）〉の本体である〈感受性〉でしかないならば、上記本文に「日常（不断）」と書き込まれたのは筆者を筆頭にした人々が生き続けるかぎりでの、〈感受性〉の「日常（不断）」という字句通りの〈運動（行動）〉を意味させようことであり、これも疾うに一見したことである）。ところが人は、筆者が以下で〈感受性〉に関する、さらなる見方を示すとき、それでも前記している、〈感受性〉に関した見方と比べ、その異同を知っては今後者（〈感受性〉に関した）として記した見方は一体何であったかと不審を抱くにちがいない。そこで筆者はこれまで語ってきた、後者の見方に対し、あたかも後者の見方を差替えるがごとき見方をまず説明したうえで、ここには筆者なりに見出し得た、いくつかの理由の提示をもって、「〈感受性〉」に関する、

さらなる見方」が適當する（後述）と、しかもかかる見方は思うに、後者の見方の全面的差替えまでに至らないと指摘しておくことができる。その「〈感受性〉に関する、さらなる見方」とは次の通りである。すなわち、〈能動〉能力〈感じる〉とその〈受動〉能力〈感受性〉は例の、他者の〈苦しみ（不幸）〉や〈世界の美〉なる各外的対象に「直接」かかわるのでなしに、こうした外的対象が、上記した各能力の〈運動（行動）〉以前に〈運動（行動）〉していなければならぬと筆者に思える〈能動〉能力〈感覚する〉とその〈受動〉能力〈感覚〉によって身体（器官）内部に、要は「目」を例にしては、この「眼球」の奥の「網膜」に映し出される、かの〈表象〉にかかわると。〈感じる〉とその「〈感受性〉」に関する、さらなる見方」でいう〈表象〉は、同じ〈表象〉を生じさせるといわせども、これに働きかけたり、働きかけられたりした〈感覚する〉とその〈感覚〉による〈運動（行動）〉で〈変化〉を示唆させよう〈表象〉になると捉えてはならず、たとえば一度だけでなく、何度も何度も「網膜」に映る〈表象〉でしかなくなろう（聴覚、触覚などの「五感（官）」、内臓（感覚）や〈脳〉（の〈感覚〉産出にかかわる）部位においても、およそそうであろう。ただし筆者は「視覚」が「網膜」にとみなす以外の各身体（器官）に各〈表象〉がかたちづくられるか否かをここでは問わない）。そのうえ「さらなる見方」における〈表象〉は疾うに触れ、後述もする〈量〉に、また〈時間〉に関係している。しかして確かなことは、「さらなる見方」が、要はこの〈運動（行動）〉すなわち〈感受性〉が何らかの外的対象を一例に掲げた「目」に「受容」させるべき、〈感覚〉による〈運動（行動）〉で生み出された〈表象〉に従い、これを立て続けに「何度も」反復させてもたらされるにあるとはいえ、かつ筆者に、「何度も」と記させ生じる〈表象〉がその都度同じそれか、あるいは直前のそれに類似か異なるかを知らせぬし、まして「何度も」と繰返される〈表象〉がそのせいで、強く激しく映し出されると教えくれぬとはいえ、少なからず、こうした〈表象〉の形成に対応する〈運動（行動）〉すなわち〈感受性〉は筆者にいう「日常（不断）」に発する能力でないと理解さすことにしかない。「日常（不断）」に発する、この能力もすでに触れおいたように、人が死に立ち会うまで身体（諸）（器官）を「動き」続けさせる〈運動（行動）〉すなわち〈感受性〉であることに間違いないが、その場合にさえ、外的対象が何より先きに〈感覚〉能力に映し出さ

れて成った〈表象〉に対し、この身体（諸）（器官）（内部）における〈運動（行動）というもの〉に変わりがなくとも、今度は筆者に上記させた能力が〈質的〉を示す〈運動（行動）〉すなわち〈感覚〉（能力）としてでなしに、今述べた〈量的〉をあらわす〈運動（行動）〉すなわち〈感受性〉として「受容」すべく対応する、換言すると〈量的〉であることは筆者が推測するに、〈表象〉なるものが「日常（不断）」での「五感（官）」などのいずれかに呼応し生じることにより起因せども、要はあの「眼球」を例にみると、この奥の「網膜」に映し出される〈表象〉をして「色彩」を読み取らせる（その読み（判断）は〈理性（知性）〉の手助けによった）ときは、外的対象を「網膜」なる身体（器官）内部で〈質的〉に〈変化〉させた、〈能動〉能力〈感覚する〉とその〈受動〉能力〈感覚〉による〈表象〉になるほかなかれども、何はさておき、この〈質的〉を示す以外の〈表象〉でなければならないことにある。なぜなら自然、生命、社会、人文各科学系列でそれなりに問題にされよう〈質的〉との表記の〈質〉や〈量的〉との表記の〈量〉を語るについては専門家の研究成果に任せ、ここはたとえば身体諸感覚器官に属す能力で生じる「色彩」をはじめ、「味」や「匂い」などを、これまでに一見した〈質〉にとどめることにし、この〈質〉はさまざまな外的対象をして上記の〈運動（行動）〉を経たうえで「受容」せしめられる〈表象〉のそれぞれの側面をいい当てさせるとみなし得る一方で、〈量〉はさまざまな外的対象から〈質〉の各側面を除去させてもなお各〈表象〉に残る、その側面をさすと指摘できるからである。

筆者にとって、前段最後の一文に記した、〈質〉は何らかの外的対象を身体（器官）に「受容」するうえで、そこに属す機能たる〈感覚する〉とその〈感覚〉を働きかけたり、働きかけられたりする〈運動（行動）〉でもって〈表象〉をかたちづくる、その側面をさすし、〈量〉は〈質〉を示す以外に「残る」〈表象〉の側面に対し、〈能動〉能力〈感じる〉とその〈受動〉能力〈感受性〉がかかわる〈運動（行動）〉でもたらされるとまとめさせ得るほか、かかる〈感覚〉と〈感受性〉にあって、かの既出引用文でさらにヴェーユに、〈感覚は質料、空間、時間も含みず〉と語られたことは、〈感覚〉があらわそう、〈質〉は〈何ものでもない〉ことを、他方〈感受性〉にはこの〈質料、空間、時間〉が〈含まれることを示唆させる（〈質料、空間、時間〉が各何かは後述する）。換言

すると〈質料、空間、時間〉が〈含ま〉れるは〈感受性〉によって可能であり、〈感受性〉は〈量〉でしかなくさせる（〈感覚〉が〈何ものでもない〉と彼女にいわせる例は、数や重さなどが〈量〉として測定可能であるに反し、〈感覚〉における〈質〉は測定できないとされるところに見出されましょうか）。それでも何ゆえ〈感受性〉が彼女に取り上げられたのか。上記既出引用文に従えば、〈わたしたちが世界を知覚することは、わたしたちにもたらされるものがたんに感覚だけではない〉といわせることにあろう。とまれ、以上に述べたことはかかる〈感覚〉ならびに〈感受性〉それぞれの特徴を、おのおの「日常（不断）」（の生（活））における〈わたしたち〉の〈運動（行動）〉に起因したことを明かしくるが、その際筆者は外的対象をたとえば人に置き換えて、この「人」を〈感覚（視覚）〉で「見る」ことから語るにしろ、この「人」が賢いや悪賢いと形容されたりもしたならば、「賢い」や「悪賢い」は彼女でなくとも、〈感覚〉から導き出される〈質〉に組み入れ済ませられるであろうかを問わずにおれなくなる。だが答えは否である。つまり「賢い」や「悪賢い」は〈質〉には当てはまらない。さすれば筆者はこのそれぞれをいかにみることができようか。「賢い」や「悪賢い」は思うに、〈感覚〉により生み出された〈表象〉のうちの〈質〉をあらゆる側面に与さねども、その「〈質〉を示す以外」の同じ〈表象〉のなかの別の側面がかたちづくるにちがひなかろう。だからその「別の側面」にかかわる能力がみられもするならば、この能力こそ「別の側面」に働きかけたり、働きかけられしやう〈感じる〉とその〈感受性〉でなければならなかったし、各能力のおかげで「賢い」や「悪賢い」が生じるといわねばならぬであろうわけである。

ただし上記にあっては、次のことが繰返してでも確認される必要がある。すなわち一に、「賢い」や「悪賢い」の各語は当然、それぞれがヴェーユにいう〈魂（l'âme）〉中の一部位〈精神（un esprit）〉に伝わったうえで、その能力〈理性（知性）〉ではじめてかく名付けられるよう〈思惟〉される（何によって伝達されるかは後述に譲る）と。一に、今記した、「賢い」や「悪賢い」各語ばかりか、〈魂〉〈精神〉〈理性（知性）〉や〈思惟〉を筆頭とする、あらゆる語が作り出されるは〈精神〉の機能に帰すし、「賢い」や「悪賢い」が何より〈感受性〉にかかわるとて、おのおのがもしや〈感受性〉以上により強く〈感じ〉られる〈感

情 (affection や sentiment))、さらに強いとされる〈情動 (émotion)〉と〈情念 (passion)〉として受け取られる場合の、後者の能力に対する命名も同様であろうが、しかし各能力は〈感覚 (sensation)〉や〈感受性 (sensibilité)〉も含め、〈魂 (l'âme)〉中のもうひとつの部位〈魂 (une âme)〉に生じるのであり、しかも以上の能力はすべて、まずは〈une âme)〉の〈運動 (行動)〉でもたらされ、ときに次なる部位〈un esprit)〉に伝えられるのであった(だから「賢い」や「悪賢い」が〈une âme)〉への関与抜きに、直接〈un esprit)〉に伝わることはない)と。そこで一に、14歳当時の彼女が、「日常(不断)」に接する(「見る」)兄アンドレの〈並外れた才能〉に対し、畏敬の対象にできたはむろんのこと、これと反比例させてのことか、彼女自らを兄の〈並外れた才能〉に欠けると〈絶望〉だけでなく、〈死〉を意識させたと振り返っていたことにあって、たとえば、〈並外れた才能〉を即「賢い」に結びつけるはいささか強引すぎるやも知れないが、それでもこうした語(「賢い」)への換言が許されるならば、筆者には〈並外れた〉という形容詞が兄をたんに「見る」ばかりにとどまらせない、要はその〈質〉を予想させない「賢い」雰囲気醸し出すと思わせる。とどのつまり〈並外れた〉は〈感覚(「見る」)〉によって成る〈表象〉(のうち)の〈質〉を示す側面を取り払っても、かかる〈表象〉に残る、〈量〉にかかわる「別の側面」をいい当てるに適當することを含意させていなければならなかったのだ。だから「賢い」がここではたとえば程度(度合い)をあらわすとみえる〈並外れた〉にふさわしい「心象」を与えるかぎり、〈量〉にかかわり、〈表象〉の「別の側面」に「賢い」として〈運動(行動)〉するのはもはや〈感覚〉がでなしに、〈感受性〉が可能にすることであるといわねばならぬわけである。換言すると何らかの外的対象がある身体感覚器官の〈感覚〉により生み出される〈表象〉をして〈質〉を示すのとは相違さすといわせる「別の側面」で働きかけたり、働きかけられたりするものが〈感じる〉とその〈感受性〉であり、こうした〈運動(行動)〉から、今問う「賢い」(や「悪賢い」)がもたらされてきたのだ。そのうえ注意すべきは、「賢い」が彼女にいう〈魂 (l'âme)〉に成り立たずにはいないことにある。何せ「賢い」はその〈精神 (un esprit)〉の部位の〈理性(知性)〉によってそう名付けられねばならないからである。要するに、彼女にいう〈魂 (l'âme)〉中の一部位〈魂 (une âme)〉で成る「賢い」の他の部位〈精神 (un

esprit)》への伝達なしに、この能力〈理性(知性)〉の〈思惟〉で「賢い」と命名されることはないし、あるいは〈魂(une âme)〉で〈感受性〉に発する〈絶望〉を〈感情(情動や情念)〉という各通名にし得る〈理性(知性)〉の〈思惟〉を用いることさえ不可能だといわなくてはならなくなるからである(先に本文で「心象」と記したはすでに一見していたように、身体に生じた〈感受性〉が〈魂(une âme)〉に伝達されてその〈感受性〉となる場合や当初より〈魂(une âme)〉に生じた〈感受性〉となる場合を、さらにこのそれぞれが〈感情(情動や情念)〉となる場合を含め、〈感受性〉が諸感覚器官の作り出す各〈表象〉に立つことに間違いなくとも、その〈感覚〉における〈表象〉の表記と区別させるうえで、筆者は以下に述べるのが、つまり〈感受性〉の〈魂(une âme)〉への伝達が可能であり(〈感覚〉もそこに伝わる)、この〈魂(une âme)〉の「別の側面」として映し出される像がみられるならば、かかる「像」をやはり〈感覚〉における〈表象〉といわずして、「心象」とみるほかなかったことによる)。かつ前記したなかで確認されねばならぬは彼女にいう、〈魂(l'âme)〉中の〈魂(une âme)〉に構築される像こそ、筆者が思うに、外的対象の「受容」の際の「側面」をさすところの、〈感覚〉に対応させ、〈質〉にかかわらせる〈表象〉であり、同時に同じ外的対象の「受容」の際にときに「別の側面」を示すところの、〈感受性〉に対応させ、〈量〉にかかわらせる、上記括弧内で述べた「心象」であって、この〈表象〉や「心象」を映し出させるは彼女にとって、〈魂(une âme)〉以外にないことにある(なお当段落中〈感受性〉に関し記した同様なことを〈感覚〉に対して補足すると、〈感覚〉に発する〈感情(情動や情念)〉も〈質〉の〈量〉を示唆させずにおかないし、当然〈魂(une âme)〉に、その「側面」として浮かび上がる各能力にさせられようことである)。そしてさらに思うに、なかでも〈感受性〉にあって、〈感受性〉やその〈感情(情勢や情念)〉という各能力に匹敵させて捉えおかねばならぬのがこれまで多少触れてきた〈頭痛〉、〈朗誦〉や他者の、かつ彼女自らの各〈苦しみ(不幸)〉ならびに〈世界の美〉などであり、このそれぞれが〈量〉または〈量〉の〈量〉となって〈魂(une âme)〉の「別の側面」での「心象」として映し出されることにあると、そのうえ前記した〈質〉あるいは〈質〉の〈量〉にかかわる〈感覚〉やその〈感情(情動や情念)〉をも含め、以上のように各名付けさせられ

るは繰返すが、おのおのが〈魂 (l'âme)〉中の一部位〈精神 (un esprit)〉に伝達された〈これはもとより〈魂 (une âme)〉からの伝達を意味する〉うえで、その〈理性 (知性)〉能力における〈思惟〉による命名作用にすぎないとみたことにある。

そこで〈魂 (une âme)〉で生じよう、前段に記した両能力について、わけでも〈感受性〉を主にしてより語られるべきは、〈感受性〉が〈感覚〉の場合にみるのと同様に、〈わたし〉が生き続けているかぎりでの、「日常 (不断)」の〈運動 (行動)〉をさす能力であったと指摘させ得ることにある。かかる〈運動 (行動)〉は〈わたし〉を代表させるかにみえる〈魂 (l'âme)〉の能力によるか、はたまた身体的能力によるかに今すぐ答えずとも、このいずれかの能力が外的対象を「受容」してくれるであろうし、むろんヴェーユにかぎらず誰もが用いる能力は、この外的対象の「受容」を〈能動〉能力〈感覚する〉とその〈受動〉能力〈感覚〉という〈運動 (行動)〉でもって可能にさせられるであろう。換言すると外的対象を何よりも先きに「受容」せんとするは一言していえる、いわゆる〈感覚〉能力の〈運動 (行動)〉要は働きであろう。ところが外的対象が上記した他者の〈苦しみ (不幸)〉ならびに〈世界の美〉であるとされるとき、筆者にいわせると、この外的対象が〈感覚〉の外的対象への〈運動 (行動)〉により成った〈表象〉の「別の側面」として「ときに」映し出されるように対応させられるは〈魂 (une âme)〉や身体各能力すなわち〈感受性〉やその〈感情 (情動や情念)〉でしかなかった。なかでも外的対象がこうした〈表象〉形成にあってその「別の側面」として「ときに」映し出させるごとく「受容」されることはそれ自体、そこに〈能動〉能力〈感じる〉とその〈受動〉能力〈感受性〉という〈運動 (行動)〉が関与せずにはないことを示唆させるほか、彼女に一言していわせる〈感受性〉が働いていたことをさえあらわすのだ (本文で以上に述べたことは〈能動〉能力や〈受動〉能力をはじめとしてすでに触れおいたことであるにしろ、ここは次のことを再度確認する。それは、外的対象自らが〈わたし〉あるいは〈魂 (l'âme)〉や身体各能力のそれぞれに、たとえば「他者の〈苦しみ (不幸)〉ならびに〈世界の美〉であると名乗ったり教えたりはしないばかりか、名乗り (命名し) 得るは〈魂 (l'âme)〉中の〈精神 (un esprit)〉部位での〈理性 (知性)〉の〈思惟〉に任せられねばならなかったこ

とにあると。それに筆者にとって、〈わたし〉が即〈魂 (l'âme)〉であるといわせ得るかどうかについては改めて論じるしかないと断わる一方、「ときに」と記させたことについては、その「ときに」をして、〈表象〉形成の際に問われた〈感覚〉と〈感受性〉の各能力を〈表象〉の「側面」や「別の側面」としてこの順番に〈運動 (行動)〉せしめることが、それとも〈感覚〉だけを、もしくは〈感受性〉だけを〈運動 (行動)〉せしめることが含意されると付記せざるを得なくさせる)。要は〈感覚〉による〈表象〉形成のなかで、〈感覚〉のかかわる「側面」としてではなく、「別の側面」として〈運動 (行動)〉するは上記した〈感受性〉とその〈感情 (情動や情念)〉であり、こうした能力は〈表象〉をでなしに、筆者に見えられた「心象 (image)」を新たにかたちづくるに役立つといえたのだ。換言するとこれも筆者に一言にしていわせる〈感受性〉すなわち〈運動 (行動)〉により「別の側面」として映し出された像が筆者の拙い〈思惟〉で「心象」と名付けられるし、「心象」と記させたゆえに、「心象」は身体によりか、〈魂 (une âme)〉に浮かび上がる像と理解するほかない (と同時に「心象」は身体 (の〈感受性〉) を契機にして、そこから〈魂 (une âme)〉に伝えられて成る場合もあり、かかる関係においてこそ、筆者にさえ主張させずにいない、唯一の「身心 (心身) 合一」が成立するとここにきてようやく証し得たことになる)。要するに、身体や〈魂 (une âme)〉が例の、他者の〈苦しみ (不幸)〉や〈世界の美〉を各「受容」するか、身体から〈魂 (une âme)〉に伝達されて後者に「受容」させるかのいずれかにあつては、何より先きに「目 (視覚)」で「ときに」「他者」を、「ときに」〈世界 (自然)〉を「見る」ことから〈運動 (行動)〉させられるだけか、この〈感覚〉による〈表象〉形成として、なかでもその「別の側面」として生じる〈運動 (行動)〉が〈感受性〉であったれば、〈感受性〉は他者の〈苦しみ (不幸)〉や〈世界の美〉を「目 (網膜)」と同じく、〈魂 (une âme)〉 (身体の一部にみられる (脳)) の内部の、「心象」の出所である「別の側面」としてもたらずべく、〈運動 (行動)〉するなかで、たとえばかかる「別の側面」は〈感受性〉にとって、内的対象にみなされるのが当然であり、外的対象を取り入れるところではなくなろう (他者の〈苦しみ (不幸)〉や〈世界の美〉があゝの〈思惟〉にてそれぞれにそう名付けられるにしても、それ以前での、かの「心象」において、おのおのがいか

にあるかについてはのちに触れるほかない)。

ところで筆者は、この〈感受性〉が一般に知れ亘る表現の身体感覚諸器官で〈感覚〉と同様、「日常(不断)」に〈運動(行動)〉していることをここで繰返し記すとともに、一方の〈感覚〉〈運動(行動)〉にかかわることを以下に付記しておく。〈感覚〉〈運動(行動)〉における身体感覚諸器官は内臓感覚器官を除いて、一応身体表面に備えられてあるといわれるが、しかし〈感覚〉〈運動(行動)〉それ自身のことをみるとなると、それは〈魂(l'âme)〉までも〈脳〉として身体に含ませ捉えたとして、当然身体内部に属す機能でしかないとみられるし、こうした〈運動(行動)〉はあたかも直接何らかの外的対象に向けられ、しかもこの外的対象をそのまま身体内部にかの〈表象〉として映し出させることになる。されどあの「目(視覚)」の例を再度取り上げていうに、これは確かに、「見る(感覚)」〈運動(行動)〉でもって、外的対象が〈視覚(眼球)〉内(奥)部の「網膜」に「受容」されたことを示唆させども、〈感覚〉による「受容」とは、〈感覚する〉とその〈感覚〉たる〈運動(行動)〉が外的対象を「見る」だけにとどまらせずに、同時的に「見る」〈運動(行動)〉をしてこの〈表象〉を「網膜」(の側面)に形成させることを、かつヴェーユによればこの〈表象〉をして〈質〉をもたらしさせかねないことをさすがゆえに、「網膜」は、要はその〈表象〉の「側面」は〈感覚〉にとって内的対象にみなさざるを得なくなる。さりとてここは次のような見方もできる。つまり内的対象と筆者に指摘されたところで、〈感覚〉〈運動(行動)〉は先きの例では外的対象それ自身を「そのまま」「網膜」に〈表象〉として映し出すかぎり、外的対象と内的対象の、いわば中身たるは同じであるとみえないか。否である。その〈感覚〉〈運動(行動)〉がたとえば前記した花の「色彩」を赤と「見る」ごとき〈質〉を露にすると述べたは彼女に〈運動は... ひとつの変化をもたらし... 感覚をたえず与えてくれる。しかし変化というものは質的であり、運動というものは量的である〉と語らせることを想起するだけで十分納得し得よう。〈運動〉の一が〈量的である〉(これはもとより〈感受性〉のことを示す)についてここで言及するは省くとも、引用文中の〈変化〉とは筆者が思うに、外的対象が「そのまま」「網膜」に映し出される像(表象)であっても、実際は「網膜」上に倒立して映るほかないことにある。だからこの倒立像(表象)は〈感覚〉が可能にさせるだ

けであり、倒立像（表象）をして〈変化をもたらす〉させる一であることをさすと、要は「網膜」での、この像（表象）をば「見る」ところの外的対象と〈変化（異同）〉させずにいないといい得るがゆえに、「網膜」においていわせた内的対象を外的対象と比べさせては、その中身が同一であるとみえないわけである（だが〈魂〉は「網膜」での倒立像（表象）を形成させはせずに、外的対象をすぐさま「日常（不断）」に「見る」ようにみせる。したがって〈感覚〉は〈変化〉を蒙らせる〈運動〉により、こうした〈質的〉も含めさせよう〈質〉以外をあらわすことができない。再度前記した例でいえば、「花」を「赤（い花）」と「見る」ことで、「網膜」におけるその〈表象〉が〈魂（l'âme）〉（脳）中の〈魂（une âme）〉を通過させた〈精神（un esprit）〉にて、「赤」（〈質〉）と見定めさせ得たのだ）。

他方〈感受性〉は、身体や〈魂（l'âme）〉を死ぬるまで「日常（不断）」に「動かす」〈運動（行動）〉であるほかに、かかる〈運動（行動）〉がさらに、たとえば〈感受性〉と同じく〈運動（行動）〉しようが、しかしこれがあの「網膜」上で〈変化〉を加えさせたところで、何ら「日常（不断）」での〈運動（行動）〉に変わりがないと思える〈感覚〉によって成る〈表象〉を「網膜」にその「側面」としてではなく、「別の側面」として浮かび上がらせることを可能にした（むしろ〈感覚〉や〈感受性〉以外のすべても〈運動（行動）〉に従う能力である）。この「別の側面」として浮かび上がるはおよそ〈質〉をあらわし得ない、他者の〈苦しみ（不幸）〉や〈世界の美〉であり、筆者をして「網膜」に映し出されたそれぞれを「心象」と命名させた（「心象」と命名した以上、「心象」は筆者にとっても、筆者の拙い〈理性（知性）〉で〈思惟〉されたことだから、当然彼女にいう〈魂（une âme）〉に「受容」され、そこを経て〈精神（un esprit）〉に伝わっていたわけである。なおなぜこうした「心象」が〈魂（une âme）〉にまで達するかについては本文で触れる）。換言すると「心象」は〈感覚〉で〈質〉を示そう〈表象〉（の側面）と相違させて捉えられなくてはならないためであり、〈質〉と比べさせては〈量〉をさす像になることにある。だが何ゆえ〈量〉にみられるかはのちに問うことにし、ここではまず筆者が前記して、「他者の〈苦しみ（不幸）〉や〈世界の美〉があのかの〈思惟〉にてそれぞれそう名付けられるにせよ、それ以前での、かの「心象」において、おのおのが

いかにあるか」と質しおいたことに答えおかねばなるまい。その際一に、他者の〈苦しみ（不幸）〉にあつては「他者」に、〈世界の美〉にあつては〈世界（自然）〉に接し、すなわちそれぞれを例の「目（視覚）」の仲立ちにより何よりも先きに「見る」ことになる（それぞれを「見る」はむろんときおりのことであり、同時にではない）。「見る」は繰返すが、「他者」や〈世界（自然）〉に対して、〈わたしたち〉が身体や〈魂（une âme）〉各内部に有する〈感覚する（ressentir や sentir と ressentir）〉（こと）とその〈感覚（sensation）〉能力による〈運動（行動）〉を意味させるほか、ここは「他者」や〈世界（自然）〉が何はともあれ身体内部（眼球奥の網膜）に各映し出されたと見立ておくことにしよう（筆者が〈世界（自然）〉を問うときはそこに人工（物）は除かれると付記しておく）。さすれば一に、「他者」や〈世界（自然）〉をおのおの「見る」ことに立って、これもまた「網膜」での倒立像にしかない、各〈苦しみ（不幸）〉や〈美〉の〈表象〉をその「別の側面」として、要は「心象」として「網膜」に映し出すべく「受容」させられるうえでは、当然身体における〈感じる（ressentir）〉（こと）とその〈感受性（sensibilité）〉の能力たる〈運動（行動）〉が課せられていなければならなかった。換言すると「他者」から〈苦しみ（不幸）〉を、あるいは〈世界（自然）〉から〈美〉を上記した各身体内部にだけでなく、各〈感じる（sentir や ressentir）〉（こと）とその〈感受性（sensibilité）〉の能力たる〈運動（行動）〉で〈魂（une âme）〉にさえ生じさせる必要があった。なぜなら〈苦しみ（不幸）〉や〈美〉が各〈感じる〉（こと）とその〈感受性〉の能力たる〈運動（行動）〉の出所でもある〈魂（une âme）〉にまで伝達されないと、倒立像でなくなる、いわば正常なる像「心象」として〈魂（une âme）〉（脳）に映し出されはしないと思えるからである（何ゆえ〈魂（une âme）〉（脳）に伝わるかはそこに、先記した〈量〉が、そればかりか〈量〉の〈量〉がそれ自体として、〈苦しみ（不幸）〉や〈美〉とされる、このおのおのに等しいようにかかわる、本文上記にいう〈運動（行動）〉によるからであり、これをさらに語るにはここでも、すでに触れた通り、後述に譲るというほかない。また「網膜」で成る〈表象〉にあつて「別の側面」として映し出される「心象」も「倒立像」であり、「正常」なる像を示唆させない。つまりこの「倒立像」は「網膜」では、いまだ「正常」なる「心象」と判じられないが、その可能性を有する像なので

ある。「倒立像」でない、「正常」なる「心象」は〈魂 (l'âme)〉中の〈魂 (une âme)〉で生じる像であった。なお序でにいうと、〈感覚〉によって成る、「網膜」での〈表象〉において、この「側面」として映し出される像も「倒立像」であったし、「網膜」の「視神経」から〈魂 (l'âme)〉中の〈魂 (une âme)〉に伝達されては、「倒立像」がそこで「正常」なる〈表象 (像)〉になるばかりか、そこを経て〈精神 (un esprit)〉の部位にさらに伝えられる際には、その「正常」なる〈表象 (像)〉がそれ自身をばかかる〈理性 (知性)〉の〈思惟〉によって、〈質〉と判断させられたり、〈表象 (像)〉あるいは「心象 (像)」に各関与しもたらされた諸語がかく命名させられたりしたは疾うに一見したと付記しておく。

したがって、例の〈感覚する〉とその〈感覚〉(これらの能力は以下〈感覚〉とのみ表記される)たる〈運動 (行動)〉による〈表象〉が「網膜」(身体内部)に映し出されるはむろんのこと、この「網膜」が〈感覚〉にとって内的対象になり得ると記したは、〈感じる〉とその〈感受性〉(これらの能力は以下〈感受性〉とのみ表記される)たる〈運動 (行動)〉による「心象」も「網膜」で成るといえるならば、ここはまず、上記した〈表象〉のときと同様に、その「網膜」が〈感受性〉にとって内的対象であるかどうかを明確にさせておくべきであろう (ここでは身体内部のことだけをさすがゆえに、その「網膜」を内的対象にした)。筆者が内的対象という語句に拘るは、内的対象が筆者に主張され、のちに証す身体論哲学のその構成の一に加えられると思えるからである。すでに一見した例の、外的対象である、他者の〈苦しみ (不幸)〉の語句中の「他者 (人)」に対し、あの〈感覚〉や〈感受性〉がそれぞれ「見る (感覚する)」とその〈感覚〉の〈運動 (行動)〉を通過させては、ときの順序にて各能力による〈表象〉や「心象」の映し出しに結びつかせる「網膜」をば、それ自身はもとより、そこに各能力やその各像も含められるにしろ、およそ身体内部のことにかかわるがゆえに、内的対象と筆者に呼ばせ得る以外になくなるわけである。つまり〈感覚〉や〈感受性〉の各能力が内的対象となる「網膜」で成り立たせるおのおのは〈表象〉であり、「心象」なのである。換言すると「網膜 (内的対象)」は各能力にとって〈表象〉や「心象」を各もたらす役割に供せられる。さすれば「心象」の出所を「網膜 (内的対象)」にみるというは〈感覚〉でも

かく述べた見方と同じに捉えられることをさすのであろうか。否である。上記から察知される通り、他者の〈苦しみ（不幸）〉にあって、〈感覚〉は外的対象（他者）を「見る（感覚する）」〈運動（行動）〉に導かせると同時に、「他者」のまま「網膜（内的対象）」に映し出される〈表象〉をその一場面として、要はかの「側面」として形成させる一方で、〈感受性〉は何より「見る（感覚する）」〈運動（行動）〉に伴なわれ、この〈感覚〉によって成る〈表象〉の助けを得たあとに、〈表象〉における「他者」が〈苦しみ（不幸）〉に襲われているか何であるかを「網膜（内的対象）」に映し出すべく、〈感じる〉（こと）が〈運動（行動）〉させられては、「心象」を〈表象〉の一場面として、要はかの「別の側面」として形成させるのだから、確かに「心象」の出所」にとって「同じ」に、あるいは共通して見受けられるは「網膜（内的対象）」に、〈感覚〉や〈感受性〉がそれぞれかかわることに、その〈表象〉や「心象」が映し出されることに、またこのおのおのの像が「倒立像」でしかなくなることにあるといえるが、しかしこと「心象」の発生に関しては〈表象〉のそれと多少相違しようとみておかなければならない。なぜなら「心象」は、〈感覚〉での「他者」を「見る」〈運動（行動）〉に続いて、「網膜（内的対象）」に〈苦しみ（不幸）〉が織り込まれる、〈表象〉の「別の側面」において、だからか、〈表象〉の「側面」を〈質〉でいい当てさすごとき場面に切り替えさせるのではなく、上記した〈苦しみ（不幸）〉に「等しいようにかかわる〈運動（行動）〉」の〈感じる〉とその〈感受性〉の能力を〈量〉であらわすごとき場面に切り替えさせ得るからである。筆者が「網膜」に〈表象〉における、一方の「側面」にて〈質〉に代表されてあらわれる〈表象〉自体と、他方の「別の側面」にて〈量〉を示唆させあらわれる「心象」をみると繰返すまでもなく（「側面」という場面は以上のほかにも見出されるやも知れないが）、「網膜」はそこに〈運動（行動）〉する〈感覚〉や〈感受性〉たる、身体能力のいずれかの関与によって、「側面」と「別の側面」という各場面に取って代われると指摘できる際に、各場面はそれぞれ〈質〉と〈量〉としてかかわるのであり、〈量〉とみられるは「心象」の〈表象〉に対する違いに相当しようといわねばなくなる（ちなみに〈感覚〉にとって、その〈質〉の出所となる、〈表象〉の「側面」はまた「網膜」にいわば作り出されるといえるのだから、この「側面」にあらわれる〈表象〉さえ内的対象にみなされも

しよう（この〈表象〉はむしろのこと、「心象」も内的対象となるとした「網膜」に与する各像であるのだから）し、外的対象（例の「他者」）を「見る」（運動（行動））を通した「網膜」上の、〈感覚〉で生じる「側面」（という場面）において、「網膜」は像を倒立させているからして、その映し出された像を当の外的対象としてではなく、内的対象として受け取らねばならないわけである。筆者がこの倒立像をも内的対象に見立てるは〈感受性〉による「心象」の場合も同様である。さらにヴェーユが〈感覚〉を〈何ものでもない〉と記した、まさにその語句は筆者に、〈感覚〉が「〈質〉に代表され」るところか、〈質〉といわせることさえ不可能にするであろうが、しかし〈何ものでもない〉は〈感覚〉が〈それ自体以外わたしたちに何ももたらし得ず〉を踏まえ書かれたにしても、〈感覚〉に代表される〈質〉がゆえに導き出せよう〈感覚〉すなわち〈質〉は〈それ自体以外... 何ももたらし得ないに等しいと読み得るかぎり、〈感覚〉すなわち〈質〉すら〈何ものでもない〉ことが含意される）。

前段最後の、括弧内前に記した文章中の語〈表象〉や「心象」にあって、なかでも今さらに質さねばならぬ「心象」は筆者にみるヴェーユにとって、あの「目（視覚）」を例にしたように、何よりもまず〈表象〉を「網膜」で形成すべく〈運動（行動）〉する、〈感覚（sensation）〉の〈能動〉たる身体能力（この〈能動〉能力の場合、原語は〈ressentir〉であり、訳語は〈感覚する〉であった）に比べ、〈表象〉の〈質〉（どのような）をあらわそう「側面」にでなしに、いわば非感覚的な、筆者にいう「賢い」「悪賢い」、彼女にいう〈完全な〉〈純粋な〉ならびに（他者の）〈苦しみ（不幸）〉（世界の）〈美〉に各呼応させられては、〈質〉に相対しよう〈量〉（どれだけ）を示さずにいない「別の側面」に切り替えられる場面に対し（要は筆者は「非感覚的な」内的対象を〈量〉（的）と捉え得る）、上記〈感覚〉と同じく〈運動（行動）〉する、〈感受性（sensibilité）〉の〈能動〉たる身体能力（この〈能動〉能力の場合、原語はこれも〈ressentir〉であるにしろ、訳語はしかし〈感覚する〉とせず、〈感じる〉であった）がこの〈感じる〉をして〈受動〉能力（感受性）を生じせしめながら、「網膜」に〈表象〉の「別の側面」用の倒立像を浮かび上がらせることをさした。だから〈感覚する〉とその〈感覚〉によって成る、〈表象〉の「側面」用の倒立像とはその語（句）を同じくし、しかもいずれも「網膜」にもたらされることで共通するにしても、

〈感覚〉と〈感受性〉の相違する語のためか、〈表象〉の「側面」と「別の側面」として各倒立像（〈質〉と〈量〉を各中身とした像）を異ならせるだけでなく、とりわけ〈感受性〉にとっては〈感覚〉（による〈表象〉の成立）なしに、かつ〈質〉ではない、〈量〉なる内的対象なしに、〈感じる〉とその〈感受性〉たる〈運動（行動）〉が不可能になってくるのだ。それゆえ筆者が前記していた語句「「心象」の発生に関して」は、これも繰返してまでまとめおかねばならぬが、たとえばまず、かの〈感覚（視覚）〉により、外的対象である「他者」を「見る」ことで、「他者」が「眼球」深部の「網膜」に〈表象〉として映し出されることを、そして、この「見る（感覚する）」ことによって成る、「他者」における〈表象〉に、新たに、身体能力〈感じる〉とその〈感受性〉たる〈運動（行動）〉がかかわるならば、こうした〈運動（行動）〉はかかる〈表象〉をしてその「側面」での〈質〉に代表される〈表象〉ではすでになくなり、その「別の側面」での〈量〉を示させては、もはや〈表象〉にあらずして、「心象」と呼ばさすほかないとみたのだから、この「心象」は上記した「他者」における、筆者にいう「賢い」や「悪賢い」、彼女にいう〈苦しみ（不幸）〉のいずれかでかたちづけられていることを、と同時に、あの〈表象〉を「別の側面」という場面に切り替えさせられたことを各証すと答えおく必要があるわけである。要するに〈能動〉能力〈感じる〉とその〈受動〉能力〈感受性〉が上記した「非感覚的な」内的対象にかかわるならば、「網膜」に〈表象〉の「別の側面」を新たに現出させようし、その倒立像をして「心象」といわせる原動力になり得よう。換言すると〈表象〉が〈質〉以外の〈量〉を示す「賢い」や〈苦しみ（不幸）〉なる各倒立像であるならば、もはや〈感覚する〉がどころか、その〈感覚〉が投入されるのではなく、〈感じる〉とその〈感受性〉が〈表象〉の「別の側面」として、かかる「網膜」に「心象」を浮かび上がらせる役割を担うにちがいのなからうことである（〈表象〉の「側面」が〈感覚〉にとって、あるいは「心象」を生じさせる「別の側面」が〈感受性〉にとって、それぞれ内的対象に与することは、各内的対象が外的対象を「網膜」に倒立像たる〈表象〉として映し出したのだから、外的対象をいわば正像のごとく「受容」し得たのでないことを含意させる）。

ⅩⅢ

前章を含め、これまで述べたなかで、いまだ答えていない問いなどに対して、要するに筆者が一に、〈感覚〉と〈感受性〉の「網膜」への各〈運動（行動）〉はその〈表象〉と「心象」を同じ倒立像として映し出すのかに対して、「否である」と、一に、「網膜」への「〈感覚〉や〈感受性〉たる、身体能力のいずれかの関与によって、〈表象〉の「側面」と「別の側面」という各場面に取って代われる」と指摘できた際、各能力はいかに「関与」させられるのかに対して、ここではその相違しよう一つに、〈感受性〉は前記していた「何度も」〈運動（行動）〉する能力であることを取り上げるにとどめると、そして一に、前章で「〈感覚〉と〈感受性〉が関係する」と記したことと前章以前で、外的対象を「受容」する〈感覚〉とは別に、「外部（世界）を受け止め得るのが〈感受性〉」であると言ったことは矛盾しないか、したがって「〈感覚〉と〈感受性〉が関係する」と断じたは間違いではないかに対して、筆者の能力で上記のことは「矛盾」するか否か、つまり「関係する」かどうか判断しかねるが、それでもいずれの場合も可能ではないかを筆者なりの見方で明かすことが課せられるとまずは答えおかねばならない。そこで筆者が以上の各問いに答えていくにしても、「そして一に」と最後に述べた問い以外のそれへは当の、「最後に述べた」問いへの答えを中心に引き出すなかで答えられると指摘し得るならば、上記の問いすべてに答えるには、以下に語ることが繰返しを含ませても欠かせぬことになる（要は「最後に述べた」問いへの答えをみる過程でそれ以外の問いに答え得るということである）。「〈感覚〉と〈感受性〉が関係する」といえたは、〈感受性〉が〈感覚〉によって成る〈表象〉に〈運動（行動）〉し、「心象」を形成させることにあった。例の「目（視覚）」を持ち出し振り返ると、「他者（外的対象）」を「見る（感覚する）」ことで「眼球」深部の「網膜」に映し出される〈表象〉の、その一場面という表現に当てられる「側面」に、すばやく〈受動〉能力〈感覚〉が〈運動（行動）〉させられては、すでに見し後述もする、かの〈思惟〉で〈質〉と名付けられ判断されるところの倒立像を浮かび上がらせる一方で、つまり〈表象〉に対し、この〈感覚する〉とその〈感覚〉がでなしに、〈感じる〉とその〈感受性〉が〈運動（行動）〉することにある他方で、〈感受性〉は再度いうが、〈表象〉の「側面」として映し出されよう色（彩）（香、味など）によ

りも（たとえば「他者」が身につける服の色（彩）は青と〈感覚〉される）、それら以外の、例の「他者」の〈苦しみ（不幸）〉に対応させられねばならぬのであり、後者における対応に当てはまる一場面たる「別の側面」が〈表象〉に立ちあらわれるだけか、そこに〈感受性〉がこれも後述する「何度も」をの〈量〉を伴なわすかざりでの倒立像を浮かび上がらせては、筆者はしかし、かかる倒立像を「別の側面」として与する〈表象〉にあるとみるのではなく、〈表象〉の「別の側面」での倒立像を一括して新たに「心象」と呼ぶことにした（これもまた一見し後述するが、「心象」は〈魂（une âme）〉でこそ「正像」として〈感受性〉される現象である）。要は〈感受性〉が〈運動（行動）〉する場合、〈感受性〉は〈感覚〉が〈運動（行動）〉する際とは異なる場面すなわち「別の側面」を用意しよう能力なのだ。だが筆者はここで、倒立像（の中身）が色（彩）（香、味）なる〈質〉や〈苦しみ（不幸）〉なる〈量〉によれども、こうした〈質〉や〈量〉がそれぞれ〈表象〉や「心象」を形成させるうえで、〈感覚する〉とその〈感覚〉や〈感じる〉とその〈感受性〉の各〈運動（行動）〉よりも先に生じるかを、あるいはかかる各〈運動（行動）〉よりも先に、その〈表象〉や「心象」がおのおの「側面」や「別の側面」に切り替えられたりするのかを問うことができる。上記した問いにあって、筆者は当然、〈表象〉の「側面」や「別の側面」に、それぞれあの〈質〉や〈量〉の各倒立像を浮かび上がせるのにもっとも優先されるのが各能力であり、その各〈運動（行動）〉であると、だから各能力の〈運動（行動）〉が起こされては、各倒立像が〈質〉や〈量〉にさせられると同時に、か、次いでにかこの〈質〉や〈量〉がおのおの〈表象〉の「側面」や「別の側面」として映し出されるように、「網膜」はそうした両「側面」のいずれかを留意し現出させると答えおこなうてはならないわけである。なお倒立像に関する問い「〈表象〉と「心象」を同じ倒立像として映し出すか」に、「否である」と答えたと上記して示唆させた通り、「同じ倒立像」にはなり得ないと、それは〈感覚〉や〈感受性〉の各能力の〈運動（行動）〉によって、おのおの〈質〉や〈量〉を示す各倒立像でしかなくさせられる（なかでも「〈感受性〉が〈量〉を伴わすかざりでの倒立像」は内的対象と受け取られてかまわぬ〈苦しみ（不幸）〉（や〈（世界の）美〉）にかかわっていなければならない）と今一度繰返しおく。

またここで繰返されるは、何らかの「外部（世界）」（外的対象）を「見る（感覚する）」ことで「網膜（身体内部）」で成る、この〈表象〉に、〈感覚〉や〈感じる〉とその〈感受性〉が各〈運動（行動）〉し、それぞれときに〈表象〉の「側面」や、ときにその「別の側面」に〈質〉や〈量〉の倒立像を浮かび上がらせるにとどまるだけでなく、要は各倒立像が〈脳〉にとどけられては、筆者をはじめとする〈わたしたち〉がその各倒立像を〈脳〉で今度は各「正像（非倒立像）」として「受容」され得ることをして一般（つまり「日常（不断）」）にいう「見る」ことを可能にさせることに、さらに上記した〈脳〉についても、〈脳〉を換言させよう語が今日までに、霊（魂）、心、精神や意識などに推移されるなかで、ヴェーユは主に〈魂（l'âme）〉の語を〈脳〉に当てていたことに、しかも筆者に指摘された、「網膜（身体内部）」における、〈表象〉の「側面」からは〈質〉を、これも筆者に「心象」と見立てられた、〈表象〉の「別の側面」からは〈量〉を〈脳〉である〈魂（l'âme）〉にとどけさせて、〈魂（l'âme）〉で各倒立像が各「正像」にみなされないことには、各「正像」がこの〈魂（l'âme）〉にて各「正像」と名付けられはしなかったことにある。そして最後に答えたことは、〈魂（l'âme）〉が彼女にあって、〈魂（une âme）〉と〈精神（un esprit）〉の各部位を基本にして構成されていたことに起因すると繰返せざるを得なくする。なぜか。各「正像」を例にするまでもなく、それと命名できたは、〈精神（un esprit）〉が有する能力〈理性（知性）〉により、その〈思惟〉により〈科学的にもかのように語られたり判別されたりするからである。このことは同時に、各「正像」が〈魂（une âme）〉を通過せずに、〈精神（un esprit）〉にさえ伝達されないことを含意させるといわなくてはならないのだ。したがって〈魂（l'âme）〉内のことでは、あの〈表象〉や「心象」での各「正像」は〈魂（une âme）〉から〈精神（un esprit）〉へと伝わる順序に従わねばならぬ、とどのつまり〈魂（une âme）〉に身体（内部）からとどけられよう〈質〉や〈量〉の各「正像」は〈魂（une âme）〉にばかりか、〈精神（un esprit）〉に伝えられたことが明かされくるわけである。その際〈魂（une âme）〉に、〈受動〉能力の〈sensation（感覚）〉と〈sensibilité（感受性）〉がかかかわるとともに、これら能力がこの各名称を変えずにそのまま身体各〈受動〉能力にも用いられていたと筆者に振り返させるはともかく、彼女はその各〈受動〉能力に対応しよ

う〈能動〉能力に、まず〈sentir〉を、次いで〈ressentir〉を取り上げていたとみることができる。〈sentir〉はむろん〈感覚する〉や〈感じる〉という各訳語になる。しかもここには、〈魂 (une âme)〉が一に、身体に生じた〈感覚〉や〈感受性〉の各〈受動〉能力の影響を受けることなく、自ら有する〈感覚する〉や〈感じる〉各〈能動〉能力をもって、はじめて「外部 (世界)」(外的対象)に相対し〈運動 (行動)〉させる場合と、あるいは〈魂 (une âme)〉が一に、身体 (内部)での内的対象たる〈表象〉や「心象」のそれぞれを自らにともにでなく別々に「受容」させたうえで、〈魂 (une âme)〉自らの〈感覚する〉や〈感じる〉各〈能動〉能力をもって、各内的対象に相対し〈運動 (行動)〉させる場合とに類別されるといわせ得る (上記前者や後者の各一に適當する例は彼女によると、おのおの順に〈世界の美〉であり、〈苦しみ (不幸)〉であるように見受けられる)。一方〈魂 (une âme)〉にみられる〈ressentir〉は上記した外的対象や内的対象から伝わるこのそれぞれに対し、同時〈運動 (行動)〉でないはもとよりのこと、〈sentir〉の各〈運動 (行動)〉より時間を置くかして二回目以降か以上に〈再び感覚する〉や〈再び感じる〉各〈運動 (行動)〉として用いられる場合であると読み取らせようことを付け加えておかねばならない。さらにここで、筆者に今一度、〈ressentir〉をば〈魂 (une âme)〉中の〈能動〉能力といわせるのではなく、身体 (内部)中の〈能動〉能力と捉えていたところに戻って補足して語らせることが許されるならば、後者における〈能動〉能力の訳語が前者にいう訳語のうち〈再び〉を除いた〈感覚する〉や〈感じる〉のそれぞれであったにしろ、またこうした訳語にあって、なかでも〈感覚する〉という、その〈運動 (行動)〉にあって、「目 (視覚)」により成る〈感覚〉を諸感覚すなわち「五官 (感)」の代表に立てて問い、これに筆者なりに答えてきたにせよ、当の「五官 (感)」たるは「視覚」をさすだけでない以上、残りの〈感覚〉のことを明らかにさせないでは、唯一取り上げた「視覚」のことさえ不十分な答えと受け止められるほかにならう。前記していた通り、確かにこの「視覚」以外に聴覚、味覚、嗅覚と触覚を含めて「五官 (感)」であると誰しにもいわせようし、かかる身体 (諸) 感覚器官には内臓 (諸) 感覚 (器官) も加えられよう。しかし筆者はこれら残りの一について言及できる余力をものは持ち合わせていないだけか、「視覚」をはじめとした諸感覚のことは各分

野を専門とする人たちの研究に任せられるしかなくなろうが、それでも筆者が例とした「目（視覚）」で少しく答えたとき〈感覚する〉とその〈感覚〉能力の〈運動（行動）〉は残りの諸感覚器官のそれぞれにおいて、同時的でなく生じ、その諸感覚をほぼ間違いなく〈魂（une âme）〉に伝えることは確かだといわなくてはならぬのである。

さて前章ならびにこの章の前段までにあって、筆者は「〈感覚〉と〈感受性〉が関係する」ことを明かすために（またその一文（内容）を「さらなる見方」ともいい換え得て）論じてきた。加えて上記した各章以前のいくつかの章に亘り、筆者は〈感覚〉よりか〈感受性〉に立つことで、〈感じる〉とその〈感受性〉が「直接」「外部（世界）を受け止め得る」能力であると主張したし、そこではだから、この能力自身を身体（内部）に有しながらも、「外部（世界）」要は外的対象と「直接」接触するごとくにみえては、外的対象を当然身体（内部）に「受容」させずにいない〈感覚〉と同様に捉えられねばならなかった。だがこのとき注意すべきは、外的対象の「受容」に向けて〈運動（行動）〉する〈感じる〉とその〈感受性〉が〈感覚〉や〈感覚〉によって成る〈表象〉（ならびに〈表象〉の「別の側面」）と「関係する」ことはない能力にみなされること、換言すると〈感じる〉とその〈感受性〉の〈運動（行動）〉は身体（内部）において、上記した〈感覚〉（またその現象）に依存されるのではなく、当の〈運動（行動）〉する能力で「心象」をかたちづくらせることにあった。今筆者が「身体（内部）」と記したはこれも一見していたように、〈感じる〉とその〈感受性〉が「身体感覚諸器官」と一般に語られる、何らかの器官を、たとえば「視覚（感覚）」をこの「身体感覚諸器官」の一として共有させ利用し得ることを示唆させるにあった。とはいえそこでは〈感覚〉が外的対象を身体（内部）の「目（眼球）」で「見る（感覚する）」ことからはじめられるのに比べ、〈感受性〉が例の〈苦しみ（不幸）〉たる外的対象を上記と同じ身体（内部）要は「目（眼球）」の深部「網膜」に作り出させるように〈感じる（ressentir）〉か、あるいはそこに作り出された倒立像を〈感じる（ressentir）〉かさせられるばかりか（いずれにみえるかは後出）、人に「正像」として〈感じる（sentir）〉ことができるならば、「正像」をもたらすべき〈魂（une âme）〉にまで伝わろうことは「さらなる見方」ですでに述べていた例と変わらなかった。しかし筆者のみるとこ

ろ、外的対象である、かの〈苦しみ（不幸）〉や〈世界の美〉については、一度は触れた通り、前者がもつぱら身体に、後者が端から〈魂（une âme）〉に各「受容」させられたし、前者は後者にさえ伝達された。なぜか。それは〈苦しみ（不幸）〉も〈（世界の）美〉も〈感情〉をあらわす表現であり、〈感情〉自体を生み出すは〈魂（une âme）〉しかなく、そこにこうした〈運動（行動）〉を促すは〈魂（une âme）〉の能力である〈感受性〉にほかならなかったからである。筆者からすると、かかる表現になるは、〈苦しみ（不幸）〉や〈世界の美〉が〈魂（l'âme）〉中の〈精神（un esprit）〉部位に伝わっていなければ、かく表記したごとくには名付けられることがないであろう。何せ〈精神（un esprit）〉に伝わる〈苦しみ（不幸）〉や〈世界の美〉すらも〈理性（知性）〉やその〈思惟〉の〈運動（行動）〉をして「名付け」るとき判断を可能にさせたといえると同時に、このこと自体は〈苦しみ（不幸）〉や〈世界の美〉がそれぞれ前もって個々に、同じ〈魂（l'âme）〉中の、彼女のみる、その構造に従っては、〈精神（un esprit）〉に繋がるための〈魂（une âme）〉にとどいていることを前提にする必要があったからである（「網膜」の〈感覚〉（における〈表象〉）も当然〈精神（un esprit）〉に伝わり、その〈理性（知性）〉や〈思惟〉で、〈表象〉の「正像」の色（彩）がたとえば青（色）と認識され、かかる色（彩）が〈質〉と判断される）。したがってここで確かめておかねばならぬは、〈苦しみ（不幸）〉や〈世界の美〉をはじめとした「非感覚的なもの」を彼女に印象づけさせよう「外部（世界）」（外的対象）に対し、筆者に質されている〈感受性〉が果たして筆者にいう、例の〈感覚〉（の〈表象〉）とのかかわりなしに〈運動（行動）〉できないとみなした「さらなる見方」の、それとも「直接」「関係する」とした見方のいずれに、あるいは以上二つの見方の両方に各通用すると認められるかを判じさせることにある。

〈感受性〉は筆者にとって、「〈感覚〉と〈感受性〉が関係する」すなわち「さらなる見方」とよりも、〈感覚〉と「関係する」ことがないといわせるところに与していなければならない。以下この二つの見方に対して筆者なりの主張を展開していくために、まず二つの見方で共通することは何かをかの「目（視覚）」を例に振り返ると、「何か」とは一に、二つの見方の基を各同じ〈感受性〉にみることに、一に、この各同じ能力をして〈感覚〉能力と同じ身体感覚諸器官を

利用させること、一に、この項に関し生じる、多少の疑問への答えを今は省くにしる、両方（の見方）にとって、およそ、身体（内部）（「目」の深部「網膜」）では、〈苦しみ（不幸）〉や〈世界の美〉による各同じ倒立像を、さらにその各同じ倒立像の〈魂（l'âme）〉への各伝達では、なかでも先きに〈魂（une âme）〉の部位にて、その各同じ倒立像を各同じ「正像」にしてそれぞれ浮かび上がらせること、一に、この項に関し生じる、多少の疑問への答えもまた後述に譲らねばならぬにしる、両方（の見方）にとって、「日常（不断）」の〈わたしたち〉の身体（内部）の能力（とりわけ今も質す〈感受性〉）の、さらに〈魂（l'âme）〉中の〈魂（une âme）〉にみられる能力（とりわけ今も質す〈感受性〉）の各〈運動（行動）〉は〈量〉であったこと（ヴェーユは〈運動というもの量は量である〉と断じていた）、あるいは筆者に記された「何度も」はかかる各〈運動（行動）〉をして〈量〉の〈量〉を含意させることにあったのだと。

前段後半部分での「何かとは」に答えたなかで付す、最初に掲げた「疑問」は、筆者が「視覚（感覚）」を例に取り上げては、この〈感覚〉をして「目（網膜）」に〈表象〉を、つまり〈表象〉の「側面」として〈質〉を示唆させる倒立像を、かつあの〈感受性〉をして「目（網膜）」に「心象」を、つまり〈表象〉の「別の側面」として〈量〉を示唆させる倒立像を各浮かび上がらせる（〈感覚〉や〈感受性〉による倒立像自体は「倒立像」という（邦語）表現を共通にせども、実際はその中身を異にする）と一見してきたにせよ、それならばこうした「視覚」である身体感覚器官以外の他の器官（聴覚、味覚、嗅覚、触覚や諸内臓感覚など）もまた「視覚」に倣ってすべて〈表象〉の「側面」や〈表象〉の「別の側面」を、その各倒立像を形成させるのか、また〈表象〉の「側面」や〈表象〉の「別の側面」という各（邦語）表現は、それでも周知の〈感覚〉が例の「網膜」上での、上記した「感覚的な」と「非感覚的な」に区別される、この各場面に対して、当の〈感覚〉にとどませるだけではないに、筆者にいう〈感受性〉をも各〈運動（行動）〉させては各倒立像の「受容」を促さずにいないような、都合のよい機能を〈感覚〉自らに与えることを含意させはしないか。さらに各倒立像が〈魂（l'âme）〉に伝達されては、かの各「正像」が〈魂（une âme）〉や〈精神（un esprit）〉のおのおのの部位で、はたまたいずれかの部位で成るのか、あるいは両部位か一部位かにいかに伝わるならば各「正像」にみ

なされ得るかにあろう。以上は念を押さずとも分かるごとく、筆者にいう「さらなる見方」によって、そこに生じた「疑問」のいくつかを掲げみたのだが、しかし筆者にはこれらに答えられるだけの力が残っていない（後述もする通り、これらは生命科学的もしくは自然科学的研究に委ねられるほかあるまい）。されど生命科学的や自然科学的によりか、少なからず人文科学的に語るしかなくなろう「さらなる見方」において指摘しておかねばならぬは、〈感覚〉による〈表象（その倒立像）〉や〈感受性〉による「心象（その倒立像）」さえ当の〈感覚〉による〈表象〉なしに、いかなる倒立像も「網膜」に映し出されはしないことであった。換言すると今「さらなる見方」を〈感受性〉に焦点を当てさせてみるに、この〈感受性〉が「網膜」に〈感覚〉によって成る〈表象〉のうち、その「別の側面」として「心象（その倒立像）」を映し出させる〈運動（行動）〉であったがゆえに、「〈感覚〉と〈感受性〉が関係する」と述べたことは〈感受性〉が〈感覚（その表象）〉に「関係」せずにおれなくなるといわせるに等しいのだ。だから「さらなる見方」では、〈感覚〉と〈感受性〉が個々別々に〈運動（行動）〉することはないわけであり、もしかするとこの点で、筆者はこうした、彼女にいわせる〈感受性〉を、たとえば前著⁽²⁾でも指摘した、あのカントに主張されよう、いわゆる《感性（Sinnlichkeit）》に見立てさせ得るであろうと付け加えておく。だが筆者は〈感受性〉と〈感性〉に関する何をここで取り上げ語ることができようか。「何」は〈量〉を指し示す。〈量〉はこの段落に掲げた、二番目の「疑問」項に相当させられるばかりか、その「疑問」への答えでしかなくなるし、さらに次章以下で、彼女にとっての〈量〉は何かを探り、〈量〉を中心にした論を展開させていくうえでも、少しく〈感性〉についてカントの言を参照し言及してゆかねばなるまい。そこで参照すべきは〈感性〉で問われる「外延量」や「内包量」であり、筆者はこれに絞ってみる。

XVI

カントが〈感性に属する感覚〉⁽³⁾という語句でもって〈感性〉や〈感覚〉の関係の一を問い質していたと指摘したは前著で触れた通りである。そこで筆者は〈感性に属する感覚〉の関係をば、たとえばかのデイドロに「〈感受性（la sensibilité）〉が〈魂（l'âme）〉で〈感覚（la sensation）〉になる」関係に築く

といわせたごとくに比べ、あたかもかかる表現とは逆の關係に、要は「〈感覚されるもの (Empfindung)〉 (以下の本文では〈感覚〉と表記する) が〈精神 (Geist)〉で〈感性 (Sinnlichkeit)〉になる」關係にみえるように捉えおいたとて、カントにいう〈感覚には... いかなる外延量も歸せられない〉⁽⁴⁾ だけか、〈すべての現象において、感覚は、だからその感覚に対象で対応する実在的なものは、内包量を、言いかえれば、度をもつということにほかならない〉⁽⁵⁾ (ヴェーユはこの原文を『哲学講義』で〈すべての現象において、感覚は、その感覚に対象で対応するものは強度をもつ〉⁽⁶⁾ と翻訳するが、筆者にいわせると、〈内包量〉つまり〈度〉あるいは彼女にいう〈強度〉はこれまでに述べてきた〈量〉に、この〈量〉はまた「はげしさ」にみなしかまわぬのである) と。要するに〈感覚〉が〈外延量〉をもつことはないとされるは、〈感覚自体においては空間についての直観も時間についての直観も見いだされない〉⁽⁷⁾ ことにある。換言すると〈直観〉についてはのちに掲げるカントの引用文の参照に委ね、ここでは、〈空間〉や〈時間〉という各広がりこそ〈外延量〉であることを確認するほか、彼がまた〈私たちが或る対象によって触発されるかぎり、その対象が表象能力へと働きかけた結果は、感覚である〉⁽⁸⁾ と語るにせよ、〈感覚〉自体が〈内包量を、言いかえれば、度をもつ〉だけであってはこの〈内包量〉つまり〈度〉は〈感覚〉にしか適当しないかどうかを判ずるは後述に譲る)、たとえばヴェーユに〈感覚は質料、空間、時間を含まず、それ自体以外わたしたちに何ももたらし得ず〉と断じられたごとく、〈いわば何ものでもない〉と彼にもいわせることにある (カントやヴェーユが〈空間〉や〈時間〉をば〈感覚〉に〈含ま〉せないとみるに對し、〈感性〉や〈感受性〉のそれぞれに認めることは、なかでも彼女に〈空間〉や〈時間〉 (の各語) とともに、〈質料〉 (の語) が添えられたこともまた本文で後述せねばなるまい)。しからば彼にいう〈感覚〉は上記括弧内にも付記した〈感性〉とどこで、あるいはいかに關係するといひ得るか。彼は次のように述べる。すなわち〈私たちが対象によって触発される仕方によって、表象をうる性能 (受容性) は、感性と呼ばれる。感性を介して私たちに対象が与えられ、だから感性のみが私たちに直観を提供する〉⁽⁹⁾ と。この引用文に〈感性〉が〈直観を提供する〉と書かれたことは彼にとって、〈感性〉なしに、〈直観〉が生じないことを、さらにいうと、〈感性〉すな

わち〈直観〉であるとみられようことを示唆させるばかりか、〈感覚〉には〈空間〉や〈時間〉についての直観も見いだされない」といわせたのだから、こうした〈空間〉や〈時間〉は〈感性〉に〈含ま〉れなければならぬことをもはや証しせずにおれなくさせる（彼にいう〈Sinnliche Anschauung（感性的直観）〉や〈Reine Anschauung（純粹直観）〉を含め（おのおのがその思想を違えることをみるは、さらに〈Intellektuelle Anschauung（知的直観）〉を語ることは省かれる）⁽¹⁰⁾、〈直観（Anschauung）〉とは他の認識方法、例の〈理性（知性）〉とその〈思惟〉による方法を〈対象〉に対して介在させないで、〈感性〉に頼って〈対象〉の本質を直接的、瞬間的に捉えさせることを、加えて一般的にいえば、〈直観〉は彼に指摘される〈感性〉だけにかかわるのではなく、「見る」や「聞く」などたる〈感覚〉を活用させて、〈対象〉は何かがすぐに捉えられることをさすであろう。だが「加えて」以下に記したことは、彼にいわせる〈感性に属する感覚〉では、また筆者にいう「感覚が感性になる」ことでは〈感性〉や〈感覚〉でも同じであることを示唆させるにちがひなかろう。そのうえここは、カントとヴェーユがそれぞれ〈感性〉や〈感受性〉（の語）を取り上げてきた経緯の比較を問うのでなしに、〈感受性〉が彼女に語られるであろう根拠を既出引用文で確認するととどめると、それは彼女が〈わたしたちにもたらされるものがたんに感覚だけではない〉と記したことから導き出されよう。要は〈感受性〉が〈感覚〉と同じような知覚の一とみなされ得るならば、〈感受性〉は〈感覚だけではない〉能力をさすことに相当させねばならぬであろうほか、例の〈質料、空間、時間〉は〈感覚〉にでなく、すでに〈感受性〉に与していると断じおく以外なくなろうことが導出されるのだ。

筆者は以下で、前段に掲げた、カントの諸引用文を参照しつつ、彼にいう〈感覚〉ならびに〈感性〉についてまとめおく（だが諸引用文のいくつかを筆者なりにまとめる試みよりか、むしろそのまま読まれる方が理解が速いやも知れぬが）。これらのなかでは、何より一に、〈私たちが或る対象によって触発されるかぎり〉と〈私たちが対象によって触発される仕方によって〉という各表現に共通する語が含まれども、それは何を示唆させ得るかを明らかにする必要がある。まず、両表現にみられる〈触発される〉にあって、この（訳）語はともに、かのデカルトにいう〈能動〉や〈受動〉の思想をヴェーユに当てはめみた筆者

が指摘するに、当然〈受動〉を含意させると、しかも上記した引用中の前者たる副詞節（従属節）に続く主節に、〈感覚〉の語が書かれたし、その〈感覚〉はこの語を前段で最初に記した際、〈Empfindung（感覚されるもの）〉であったがゆえに、〈受動〉でしかない能力なのだとみることができる。次に、前者引用文全体から、筆者にとっては、主節のうちにも語られる（訳）語（句）〈対象が〉が果たして〈表象能力へと働きかけ〉得るかを問い質すことにある。筆者は否と答えざるを得なくなる。それは筆者を含め、あのデカルトやヴェーユでさえ、〈対象が〉それ自身でいずこにも〈働きかけ〉る機能を持ち合わせることを、ましてカントにいう、〈精神（意識）〉にしかなかろう〈表象能力へと働きかけ〉ることを可能にさせると認めはしないからである。だから筆者が思うに、〈表象能力へと働きかけ〉るは〈対象（が）〉ではなくなる。それならばそこへと〈働きかけ〉るは何であろうか。カントが〈対象が表象能力へと働きかけた結果は、感覚である〉と述べたことによって、この〈感覚〉で、しかし筆者からすると、少なからずその〈感覚〉ででよりか、〈感覚する〉でなければならない。なぜなら筆者が一例としてすでに取り上げ語っていたように、「目（網膜）」が〈対象〉を映し出すうえで、こうした身体（感覚器官）に備わり発揮される〈感覚する〉とその〈感覚〉という〈能動〉と〈受動〉の各能力の〈運動（行動）〉が、さらにヴェーユにいう〈魂（une âme）〉に伝わるべく〈運動（行動）〉し、そこでかかる新たな〈能動〉と〈受動〉の〈運動（行動）〉が活かされるのは上記したカントの一文に対してであると、しかもそうした〈運動（行動）〉がみられるとなると、〈感覚する〉方こそ、あの〈表象能力へと働きかけ〉るにふさわしい、当の能力でしかなくなる（〈働きかけ〉るは〈能動〉の語意を示唆させるし、もって〈表象（Vorstellung）〉にかたちづくらせるはその〈感覚〉という〈受動〉能力である）と思えるからである。それにカントにあって、「その〈感覚〉」がもともと〈感覚されるもの（Empfindung）〉の謂でさえあることは、カントの先きの一文の一方でいう〈表象能力〉（の語句）を他の既出引用文中の〈表象をうる性能（受容性）〉（の語句）と表現した、なかでも括弧外の語句と同意であろう、〈感覚〉を受け入れる〈受容性（Rezeptivität）〉に〈受動〉として等しいと捉えさせはしないか。しかりといえる。さすれば〈感覚する（empfinden）〉という〈能動〉能力が今参照して

いる作品『純粹理性批判』では、〈感覚（されるもの）〉の語の頻度に比べ、なぜさほどでないかは分からねど、少なくともあのデカルトが〈能動と受動はつねに同一のことがらである〉⁽¹¹⁾と断じる見方に適合させる、筆者の記す例になどついぞみかけることはなかったと指摘せざるを得ないであろう。それはともかく、前記した一文〈対象が表象能力へと働きかけ〉るとされたなかでの〈対象が〉が〈感覚が〉に入れ換えられてかまわぬと指摘できるは、またこの〈働きかけ〉るが〈働きかけ〉られるとみられるは、それゆえカントでは、〈感覚〉（の語）が〈受動〉の謂でしか用いられないと受け取られるは、的外れな答えであると人に一蹴だにさせてはならないのである。そのうえ〈感覚〉に関し加えおかねばならぬはカントにとって、上記中の〈表象能力〉と書かれた〈表象〉とは疾うに触れた通り、〈感覚〉（能力）なくして生じなかったにせよ、それでも〈感覚〉（能力）が〈対象と連関する〉⁽¹²⁾といわせる〈感覚はたんに主観と連関する〉⁽¹³⁾とみなされたがゆえに、〈感覚自体はいかなる客観的表象でも全然ない〉⁽¹⁴⁾と語られたことにある。このことは〈感覚は、私たちの認識の本来的な経験的なものである〉⁽¹⁵⁾ことを含意させる。要は以上から、〈経験的なもの〉は〈感覚〉に従われるかぎり、〈客観的表象〉をではなく、〈表象〉の語を用い表現すると〈主観〉的〈表象〉を〈精神〉に映し出すことを意味させる。だが何ゆえ〈精神〉にかである。それはカントがかかる〈客観〉や〈主観〉と書き残し、その出所を〈精神〉にみよう〈悟性（理性）〉に求めるほかなかったというからである（また〈客観〉や〈主観〉がなぜ〈精神〉で語られねばならぬかは後述する）。しかれども〈精神〉は〈客観的表象〉や〈主観〉的〈表象〉を打ち出すとて、〈精神〉のどこに、かのヴェーユに問われる〈魂（l'âme）〉のいかなる「部位」に見出させるとカントにいわせるのか、彼の作品『純粹理性批判』を読むにせよ、定かにできなかった。そして、この段落で筆者が最後に問うは、〈私たちが或る対象によって触発される仕方によって〉と書かれた副詞節中の〈仕方によって〉とは何を語るかにある。その一に含意されると筆者に思えるは〈感覚〉のすべてがおよそ、この副詞節に続く主節のうちに記された〈表象をうる性能（受容性）〉にとどくわけではないことを、換言すると〈表象能力へと働きかけ〉られない〈感覚〉もあることを想定させるにすぎなくなると。

一に、カントが〈すべての現象において、感覚は、だからその感覚に対象で対応する実在的なものは、内包量を、言いかえれば、度をもつ〉と述べる引用文が再度ここに利用されるなかで、まず、〈現象 (phenomenon) (Phänomen) (phénomène)〉の語を取り上げ、彼がこの語を説明しよう引用文を掲げることにする。すなわちそれは〈感覚をつうじてその対象と連関するそのような直観は、経験的と呼ばれる。経験的直観の規定されていない対象は、現象と呼ばれる。現象において私は、感覚に対応するものを現象の実質と名づける〉⁽¹⁶⁾という引用文である。〈経験的直観〉は筆者が思うに、後述もする〈感性的直観〉の謂にいい換えられようし、〈感性的直観〉とみられようならば、〈客観〉とでなしに、〈主観〉として捉えられるやも知れない。また〈経験的直観の規定されていない対象〉を〈現象〉といわせながら、〈規定されていない〉と語られるはこれも思うに、筆者が前段の最後箇所⁽¹⁵⁾に記したごとく、つまり〈精神〉に「〈働きかけ〉られない」〈感覚〉が、要は彼に〈対応〉しないともいわせるような〈感覚〉があることを暗に含意させるのである。かつ〈私は、感覚に対応するものを現象の実質〉と彼にみなされる、かかる〈現象の実質〉はさらに思うに、〈私 (カント)〉が〈対象〉を〈感覚〉にて〈経験〉する〈実在的なもの〉で、換言すると〈対象〉に〈感覚〉で実際に立ち合う（見る (sehen) や触れる (fühlen) など）〈実在的なもの〉であり、それこそ彼がいう〈フェノメノンの実在性 (Realitas Phaenomenon)〉⁽¹⁷⁾（この〈フェノメノン〉の邦語は〈現象〉である）に該当される必要がある。加えていうに、〈現象〉とは字義に従うまでもなく、もののあらわれを、あるいはあらわれるものをさしてこようが、周知の通り、かのプラトンにいう〈イデア〉とみられた世界をあらわすに近い、いわゆる《物自体 (Ding an sich)》の世界を想定していたと思われるカントにあって、その〈物自体〉の世界に対峙する、現実的経験的世界での〈現象〉が上記で「あらわれるもの」との一般的意味に理解されるのではないことに、要するに〈感覚〉によって捉えられる〈現象〉であったにしても、〈感覚に対応する〉〈フェノメノンの実在性〉（すなわち〈実在的なもの〉すなわち〈現象の実質〉）をこれものちに記す、〈客観的表象〉を可能にする〈感性〉の一たる〈純粹直観〉にかかわらせるばかりか、これをさらに〈悟性 (Verstand)〉の導入に任せられてはじめて、彼にいう〈現象〉が確かめられることにある。次

に、当該段落の最初で掲げた引用文に関連させて、〈あらゆる感覚は、...どれほどそれが小さかろうとも、或る度を、言いかえれば、或る内包量をもっている。それぞれの色、たとえば赤色は或る度をもっている〉⁽¹⁸⁾と書かれた引用文において、筆者はようやくここに至って、〈感覚〉のいわば特色（性格）であろう、この〈感覚〉が前半の一文から、〈度（内包量）〉を、後半の一文から、ヴェーユにも語らせよう、カントにいう〈たとえば赤色〉たる〈質〉を当初より持ち合わせていると、換言すると〈度（内包量）〉も〈質〉も端から〈感覚〉に備えられてある、あるいは含まれていると断じおくことができる。したがって彼女もまた他の引用文での〈度（内包量）〉を〈強度〉とさえ翻訳している以上、カントのこうした思想を受け継いでいたといわねばならぬし、筆者もこれと同様にみておく必要があるわけである。したがって再度指摘するが、ヴェーユにいわせたごとく、以上に記されたような〈感覚〉は〈それ自体以外わたしたちに何ももたらし得ず、いわば何ものでもない〉ことがこれで証されたことになるのだ。さらにここから、筆者はカントにいう、〈空間〉と〈時間〉なる各広がりやをさす〈外延量〉や〈内包量（度）〉をそれぞれ一言で〈量〉や〈量〉と見立ておくならば、カントの場合、おのおのは〈質〉の〈内包量（度）〉という〈量〉を示す〈感覚〉と、〈外延量〉という〈量〉の〈内包量（度）〉という〈量〉を示す〈感性〉（これは前記して「後述もする」とした〈感性〉のことである）とに区分けされて捉え得ることを知る。換言するとカントにあって、〈感覚〉は〈質〉の〈量（度）〉と、〈感性〉は〈量（外延量）〉の〈量（度）〉と表記されるとみるにせよ、後者の表現が正しいかは後述する。序でにいうと、ヴェーユの場合、〈感覚〉はカントと同じく〈質〉の〈量（度）〉で、〈感受性〉はこれもカントにいう〈感性〉とほぼ同じく〈量（外延量）〉の〈量（度）〉であらわされるにちがいないのだ（なおヴェーユにあって、〈感覚〉における〈質〉の〈量〉という、また〈感受性〉における〈量〉の〈量〉という表現はすでに一見したことであると同時に、なぜこうした各表現が可能になるのか、またこれらの能力は、なかでも〈感受性〉はこの表現でいかなる意味を与えられてくるかについてはのちの本文にて論じる予定である）。

そして、筆者がさらに問題にし得るは、ここでは先きに触れたうち、カントにいう〈量〉の〈量（度）〉が、さらには筆者の研究対象である、ヴェーユに

いう〈量〉の〈量（度）〉がそれぞれ何を示唆させるかによりも（それにカントにいう〈量〉の〈量（度）〉についてなおも語ろうとするは筆者の目的ではなく、もはやカント研究者の研鑽に委ねられるほかない。ただ筆者には後段に記す、カントにいう〈感性〉に、〈量〉の〈量（度）〉と筆者に語らせた見方のなかでは、〈量（度）〉という思想が当てはめられはしなかったように思われることを付け加えおく必要がある）、何はともあれ〈その感覚に対象で対応する実在的なもの〉と記された既出語句が何を示唆させているかに筆者なりの答えを打ち出さなくてはならないことにある。ヴェーユがこの既出語句を〈その感覚に対象で対応するもの（ce qui correspond à la sensation dans l'objet）〉と翻訳した際に、筆者がドイツ語邦訳の〈対象で〉に合わせるために、〈dans l'objet〉を邦語直訳の〈対象のなかで〉ではなく、〈対象で〉とした次第である。されど〈対象で〉も〈対象のなかで〉という両邦訳もおよそ同じような意味にあらうとみられども、筆者にはそれならば、〈対象のなかで〉と直訳された方を受け取る方が、しかも両既出語句の語順を多少移させる両語句の邦訳の方が、さらにそこに筆者の、あの〈対象〉に関する主張を導入し捉える方が両既出語句の各内容をわかりやすくさせ得るであらうと窺わせる。筆者の主張とは、前記の〈対象が表象能力へと働きかけ〉るという一文で知る通り、〈対象〉それ自身が〈表象能力へと働きかけ〉ることにあるとされるのではなしに、例の〈感覚する〉が〈表象能力〉に〈働きかけ〉るとみることで（これは〈表象能力へと働きかけ〉る〈感覚する〉（能動）が〈表象能力〉として〈触発される〉〈感覚〉（受動）になると捉える筆者によって、かかる〈能動と受動はつねに同一のことがらである〉と断じたデカルトの思想をカントにさえ適当させられると見通しておかねばならぬことをさす）、この〈感覚する〉（能動）を〈対象〉（の語）に入れ替えさせたことにある（その際上記括弧内のことから、「この〈感覚する〉（能動）」は疾うに、カントにいう〈触発される〉（また筆者にいわせた「〈働きかけ〉られる」）〈感覚〉（受動）に宛がわれよう）。たとえば、〈感覚〉（の語）が〈対象〉（の語）に取って代わられることは、両既出語句〈その感覚に対象で対応する実在的なもの〉と〈その感覚に対象で対応するもの〉という表記のおのおのにすら各語の入れ替えを同じように当てはめ得ることを示唆させる。したがってこれに関し上記していたことも参照させて、筆者が〈対象〉（の

語)を〈感覚〉(の語)に代えて、〈対象で〉すなわち〈対象のなかで〉を〈感覚で〉もしくはここに用いる〈感覚のなかで〉と書き直すことができる(なぜ代え得るかは〈対象〉がカントにいう〈その感覚に対応する実在的なもの〉に〈触発される〉(反応させられる)〈感覚〉に、あるいは〈その感覚に対応する実在的なもの〉として「受容」される〈感覚〉に等しくなると思えるからである)し、かつヴェーユに語られる語句を利用し、その語順を代えて書き直すと、〈その感覚に対象で対応するもの〉が〈感覚のなかでその感覚に対応するもの〉になる(筆者が取り上げてきたカントの諸引用文中に〈対象〉の語はあわせて五回使用されるが、そうした〈対象〉の語はおおよそ〈感覚〉の語に代えられると判断できる)。〈感覚のなかでその感覚に対応するもの〉に代えられるとみるは、これもすでに指摘していたごとく、〈感覚のなかで〉という語句には、この〈感覚〉のすべてがここに記された〈もの〉に、要はカントにいう〈実在的なもの〉に、または既出の〈表象能力〉や〈表象をうる性能(受容性)〉すなわち何はさておき〈意識〉たる〈精神〉に〈対応する〉わけではなかったことにある。とどのつまりあらゆる〈感覚のなかで〉ある〈その感覚〉が繰返しいうが、〈実在的なもの〉に、〈表象能力〉や〈表象をうる性能(受容性)〉すなわち〈精神(意識)〉に〈対応〉しない場合もみられたということである。だからカントもまた自らに、〈感覚のなかでその感覚に対応するもの〉とヴェーユに翻訳された(または筆者に〈対象〉を〈感覚〉に上記のように入れ替えることと語句語順を代え書き直させた)ところでの〈もの〉こそ、〈実在的なもの〉(フェノメノンの実在性)であり、はたまた〈現象の実質〉であるといわねばならなかったことになるわけである。

一に、前段にあって筆者に、〈その感覚に対象で対応する実在的なもの〉とカントに書かれた語句を「〈感覚のなかでその感覚に対応する実在的なもの〉」なる語句と語順に代え理解させたところから、要は〈感覚〉が〈対応〉しないのではなく、〈対応する〉という〈仕方によっ〉たところから、この〈実在的なもの〉を真に生み出させ得るのが〈感性〉でなければならなかった。なぜなら既出引用文で知り得るように、彼は〈私たちが対象によって触発される仕方によって、表象をうる性能(受容性)は、感性と呼ばれる〉とみていたからである(ここに記される〈対象〉(の語)も筆者にすれば、〈感覚〉(の語)に入

れ替えてかまわないであろう)。筆者が以上から読み取らねばならぬは、まず、〈表象能力〉(の語句)とおよそ同意であろうとみられる〈表象をうる性能(受容性)〉が〈実在的なもの〉と関連せずにはないことにある。〈表象能力〉はその語句に〈能力〉と書かれたうえでは〈感性〉をさし示さざるを得ないばかりか、この〈感性〉は前記した〈精神〉(〈精神〉は後記引用文での〈心〉の語に等しく捉えられる)で、〈感覚〉によってもたらされる〈表象〉を〈主観的〉にだけでなく、〈客観的〉に作り出すことを示唆させる。だが〈感性〉が真に〈実在的なもの〉にかかわる〈表象能力〉といわれる一方で、〈表象をうる性能(受容性)〉ともみなされる際、筆者には、〈表象をうる〉と訳されたうちの〈うる〉が平仮名表記でしかないためか、〈性能〉に括弧された〈受容性〉の語はそれこそ〈精神(心)〉に、これも後記する身体感覚器官(翻訳では形容詞〈Sinnliche(感性的)〉中の〈Sinn〉を〈感覚〉にでなしに、〈感官〉に訳される)における、〈感覚〉で成る〈表象〉を「受容」させられる謂にあるか、それとも筆者にいう「〈感覚〉の〈表象能力へと働きかけ)」で、この〈能力〉〈感性〉が〈実在的な〉「〈表象〉を作り出す」謂になるかを窺うことは、あるいは〈表象能力〉や〈表象をうる性能(受容性)〉のいずれをも含意させるごとくにみえる一方で、カントに〈私たちが心の受容性を感性と名づける〉⁽¹⁹⁾と記させた〈感性〉はしからば、この〈受容性〉の意味でしかなくなるか、しかも〈受容性〉すなわち〈感性〉は〈心(筆者にいう精神)〉のどこで「受容」されるか、「作り出」されるか(しかし「作り出す」は上記引用文で語ることにかぎると、的はずれの語に相当し、論外であろう)を見通すことは、困難にちがいないのだ。それでも筆者にすれば、〈性能〉の語に対し括弧された語〈受容性〉が〈感性〉になろうからして、この〈感性〉は〈能力〉とされるはむろんのこと、同時に端から〈感覚〉による〈表象〉を「受容」することをその特性に見立てさせる必要があるといわなければならない。だから〈感性〉は繰返すに、〈表象能力〉にみられるとともに、〈主観的〉〈表象〉にとどまらず、〈実在的なもの〉に真になる〈表象〉すなわち〈客観的〉〈表象をうる性能(受容性)〉でなければならなかったといえるわけである。次に、〈表象能力〉のことよりか、〈表象をうる性能(受容性)〉という表現において、〈感覚〉が上記引用文中の語〈心(精神)〉のどこ(いかなる部位)に達するかも問題であるが、その「どこ」かに

とどいたとみて、そこに〈受容性〉すなわち〈感性〉として「受容」させられたことは一見していた通り、カントが〈感性に属する感覚〉であると語ることを、筆者が「感覚が感性になる」と指摘することを示唆させるほかなくなる。さすれば〈感性〉が〈感覚〉による〈表象〉を「受容」すると筆者にいわせること（「受容」するとはもとより〈能動〉の謂である）はその「受容」に際して、いかにあることをさすのかであろう。筆者には、これをヴェーユにいう〈魂(une âme)〉での、例の〈能動〉能力〈感じる(sentir)〉をカントにいうそれに当てはめて置換させるに、およそ〈心(精神)〉の（能力か筆者に定かにならない）〈感じる(empfinden)〉がかかる「受容」に〈働きかけ〉て、〈受容性〉である〈受動〉能力〈感性(Sinnlichkeit)〉にせしめられる（ヴェーユではカント的である〈感受性(sensibilité)〉であった）と受け取り得るが、果たしてこのような思想がカントに窺えるかを知るだけでなしに、ヴェーユも同じ思想を主張すると断じてかまわぬのかを次回で述べる、筆者にいう「さらなる見方」とカントにいう〈感覚〉や〈感性〉の関係も含まれよう、この思想を比較させてみてから、その答えを出しても遅くはあるまい。しかし加えるに、カントが上記引用文中で〈心の受容性〉と語ることは筆者に、〈感覚〉による〈表象〉がこれをもたらす身体（感官）からこの〈心(精神)〉に伝えられることを、そうした関係にあることを明らかにさせてくるが、しかし〈心(精神)〉がここで問題にされるべきはカントにあって、その〈受容性〉すなわち〈感性〉が〈心(精神)〉では何ゆえ〈感覚〉による〈表象〉を上記もした通り、〈主観〉と語られながら、それでも〈主観〉的〈表象〉としてではなく、〈客観的表象〉として答えることができたかということにある（およそ〈主観〉や〈客観〉とみなすも〈悟性〉に任せられる以外にないかどうかを問わねばならぬにせよ、それは筆者のねらいではなかった）。そう質さざるを得なくなるのはこれも上記していたように、カントが〈感性に属する感覚〉と述べたからであり、筆者に「感覚が感性になる」といわせたからである。筆者にすれば、〈感覚〉（による〈表象〉）なしに、〈感性〉（による〈客観的表象〉）が成り立つことはなかろうと思えるのにだ。しかもヴェーユと同様に、カントが〈感覚〉を〈いわば何ものでもない〉とみていたならば、〈感性に属する感覚〉という表現の〈感覚〉は〈何ものでもない〉くなりはしないからして矛盾をかたちづくる一項になろう。

「矛盾」ではないといえるならば、〈感性に属する感覚〉とされる表記中の〈感覚〉が〈感性〉に取って代わられるか、はたまた〈感覚〉が〈感性〉のなかに取り込まれ、〈感性〉とごた混ぜになり得るのかについては、筆者にいう「さらなる見方」をもって言及する際に答えなくてはなるまい。

そして、〈感性〉には〈感性的感覚 (Sinnliche Empfindung)〉〈感性的直観 (Sinnliche Anschauung)〉と〈純粹直観 (Reine Anschauung)〉がみられるとされることに筆者なりに答えておく必要がある。カントが取り上げたこれらのなかで、わけても〈感性的感覚〉や〈感性的直観〉はまた、それぞれ〈感官の感覚〉や〈感官の直観〉とも語られるそうだ(〈感官〉と訳された語は、不断〈感覚〉の謂にも用いられる〈Sinnliche〉中の〈Sinn〉であるとされる)。この〈感官〉は「感覚器官」をさすがゆえに、何はさておき、身体に属するところの、筆者にいわせる身体的〈感官〉のことである(だから上記した〈感官の感覚〉や〈感官の直観〉は身体(感官)において、〈感覚〉や〈直観〉がみられることを証明させるわけである)。たとえばカントに〈視覚は最も高級な感官である。視覚は純粹直観... に比較的近接しているものだ〉⁽²⁰⁾と語らせる。ここにいう引用文から、さらに証明されることは、〈視覚〉たる身体的〈感官〉が〈心(精神)〉的機能に關与せざるを得ない、これも筆者にいう〈心(精神)〉的〈感官〉(この〈感官〉は筆者には〈脳〉の何らかの部位に相当するようにみえども、カントには定かになっていない)に伝わらずにおれないことにある。なぜ伝達されるかはいわずと知れたこと、カントに〈視覚は純粹直観... に比較的近接している〉と捉えられたからである。〈純粹直観〉は筆者のみるところ、〈心(精神)〉に生じるとだけではなく、〈視覚〉と近くにあるといわせるからして、身体(的〈感官〉)と〈心(精神)〉(的〈感官〉)が關係すると答えおかねばならなくなる。前者における〈純粹直観〉という〈感性〉は〈心(精神)〉のかかる〈感官〉としての能力であり、身体的〈感官〉によりもたらされた〈感性〉ではない。後者にあつて、なかでも身体的〈感官〉による〈感性的感覚〉や〈感性的直観〉の当の各〈表象〉は〈心(精神)〉的〈感官〉に〈神経〉や〈血管〉でもって伝えられることを示唆させる。この身体的〈感官〉はそれ自身身体ではむろんのこと、〈心(精神)〉(的〈感官〉)でさえ、おのおのの機能に關与することがない。つまり〈感官〉にはそれ自身の各〈能動(働きかける)〉と〈受

動（働きかけられる）がない。身体的〈感官〉ではこれを出所とする、たとえば〈感覚する〉とその〈感覚〉という各能力だけが見受けられることになる。そのうえ身体的〈感官〉が〈心（精神）〉（的〈感官〉）に関係すると明かされるは、カントに〈直観は客観と連関し、感覚はたんに主観と連関する〉⁽²¹⁾と語られる通りである。要するに筆者からすれば、〈視覚〉を筆頭にした身体的〈感官〉において、外的〈対象〉に接しての〈感覚〉を〈感覚する〉〈能動〉能力とその〈受動〉能力〈感性的感覚〉が、かつ外的〈対象〉に接しての〈直観〉を〈感覚する〉〈能動〉能力とその〈受動〉能力〈感性的直観〉がおのおの〈心の受容性〉すなわち〈心の感性〉といわせた〈精神〉にそれぞれ「受容」させられねばならぬとみえるであろう。換言すると〈心（精神）〉で、〈感覚〉や〈直観〉がそれぞれ〈主観〉や〈客観〉とみなされたは、各能力が身体的〈感官〉に発してから〈心（精神）〉（的〈感官〉）に伝達された証しにちがいないということである。その〈心（精神）〉では、身体的〈感官〉における〈感性的感覚〉や〈感性的直観〉（という〈感性〉）の内的〈対象〉を各「受容」すること、すなわち筆者にいう各〈感じる〉ことによって、〈心（精神）〉（的〈感官〉）におけるその各能力が真に成るほか、上記した〈純粹直観〉は〈心（精神）〉にしか〈客観〉として生じなかったと繰返しおく（この身体や〈心（精神）〉のそれぞれにより、〈感性的直観〉や〈純粹直観〉といわせる相違がみつけれようが、こうした〈直観〉（この各名称も〈悟性〉によろうか）に対して、それでもカントの思想には〈知的直観（*Intellektuelle Anschauung*）〉がない（〈*pas d'intuition intellectuelle*〉⁽²²⁾）とヴェーユに指摘された）と付け加える。しかしながら筆者には、たとえば〈感性的感覚〉が〈感性に属する感覚〉のことをさすのか、また〈心の受容性〉に立って見定められよう〈主観〉や〈客観〉（の各語）も、その〈感性〉に〈悟性〉が導入されたからか、いまだ分からぬのであるが、少なくとも〈心（精神）〉がカントにあって、もとより〈主観〉的認識をよりか、〈客観〉的認識（これも観念論である）を司どるところとみられると同時に、身体的〈感官〉ましてや〈心（精神）〉的〈感官〉での各能力と関係させられているとみる以上、ここからも一般に流布されるように、カントの思想は大陸合理論とイギリス経験論を折衷したそれであるということが可能なのである。

註

- (1) René DESCARTES 《Traité de l'homme》(《ŒUVRES LETTRES》Gallimard) P.851 etc
- (2) 拙著『ヴェーユとサルトルー身体論哲学と観念論哲学ー』(非売品) (「第二部第二章デイドロとカントに関する一考察」中の「第二節カントにみる感性」参照) (2012年3月31日発行)
- (3) カント『純粹理性批判』(カント全集、第五卷、原佑訳、理想社) P.118
- (4) Ibid., (第四卷) P.292
- (5) Ibid., (第四卷) P.291
- (6) Anne REYNAUD-GUÉRITHAULT 《Leçons de philosophie par Simone WEIL》(Plon) P.83 (Dans tous les phénomènes, la sensation et ce qui correspond à la sensation dans l'objet ont une <grandeur intensive>)
- (7) カント『純粹理性批判』(カント全集、第四卷、原佑訳、理想社) P.292
- (8) Ibid., (第四卷) P.118
- (9) Ibid., (第四卷) P.117
- (10) <知的直観>を除いた、カントにいう<感覚>、<感性>さらに<感性的感覚>や<感性的直観>と<純粹直観>のそれぞれについては、拙著『ヴェーユとサルトル』(註(15)) P.P355-359 参照
- (11) René DESCARTES 《Les passions de l'âme》(Gallimard) P.695
- (12) カント『純粹理性批判』(カント全集、第四卷、原佑訳、理想社) P.118
- (13) Ibid., (第六卷、原佑訳) P.152
- (14) Ibid., (第四卷) P.292
- (15) Ibid., (第六卷) P.162
- (16) Ibid., (第四卷) P.118
- (17) Ibid., (第四卷) P.272
- (18) Ibid., (第四卷) P.294
- (19) Ibid., (第四卷) P.153
- (20) Ibid., (カント『人間学』(カント全集、第十四卷、山下太郎、理想社) P.76
- (21) Ibid., (第六卷) P.152
- (22) Anne REYNAUD-GUÉRITHAULT 《Leçons de philosophie par Simone WEIL》(Plon) P.258